
ダーク・マジシャン

霸王樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダーク・マジシャン

【Nコード】

N8344W

【作者名】

霸王樹

【あらすじ】

ザックスをはじめとする4人は、英国系日本人であり、過去に戦争のため人体実験をされ特殊能力を体に覚えさせられ兵器扱いされた。

そんなある日、英国系日本人の中でもランキング5（ファイブ）に入るほどの優秀能力者だったザックスは戦争中、死にかけている時にマリという愛人が犠牲になり新でザックスは生き残っていた。そしてザックスが亡くした愛人に会うことができるという聞き、彼はすぐ

にたびだった。

でも、その旅を成功させた人は誰もいない。そんな危険な旅を続ける4人。

待っていたのは術者狩り（マジシャンハンター）。彼らはザックスたちの能力を奪い取り世界を壊す計画を立てている。そんな中ザックスたちは無事に旅終えるのか……

1話 出会い(前書き)

どうも霸王樹です。

初投稿なので大目に見て下さい。

それではよろしく願いします。

1話 出会い

気づいたら、モルモットと同じだった。

俺たちは英国で生まれ、英国で日本語を勉強してきた。

俺たちはそれだけが特徴ではなく過去に悲しい思い出を持っていたんだ。

月日は経ち俺は旅人だった。

「ねえザックス、次の町で休憩しようぜ」

「ああいいだろう。あの軽く2、30分はかかるぞ」

男女の声が空に響いていて二人は故郷を発ち歩いていた。

「ふう やつと着いたぜ」

「とりあえずご飯にしましょう」

「ああそうだな」

その時、俺たちに悲鳴が聞こえた。確かに助けが必要なほどの悲鳴だった。

俺は体が自然に動き悲鳴のもとへと向かった。

「た、た、助けてよ」

そこには日系人と思われる女の子がいた。

「Don't worry Don't worry hahaha
aha」

と笑いながらナンパをするイギリス人

「おい、てめーら 何してんだ？」という顔を見せた少年。

言葉は通じないがそんな目で彼らを見ている。

俺は真つ先にその娘を助けるために術を発動した。

辺りが黒く光り相手を闇で包んでいく様子が見えた。

そう。。。俺は「闇術師」ダーク・マジシャンなんだ。

「あ。。。あの、 助けてくれてありがとうございます」と、お礼を言う女の子。

「俺は当然なことをしたただけさ、礼なんてしてもらう必要はないよ。ところで君はここに住んでるのかい？」

「ええ、はいそうです。あんまり強くないですが一応、私はソード・マジシャン剣術師です。」

「やっぱり君もそうなのか」

「あまり記憶にないのですが気づいた時から・・・」

「あ、俺はザックス・アンドレスだ。今は旅をしている」

「私はルメリ・ミサリです。ザックスって術師ランキングファイブに入っているザックスですか？」

「まあそうだな。昔だが・・・」

「こんなところで会えるなんて光栄です!!」
と驚くルメリ。

「ザックス!!大丈夫!？」

と駆けつけてきた一人の娘

「ああ心配かけたなすまん」

と言うザックス

「この子は誰? 助けた人?」
と聞く

「ああそうだ。」

「はじめまして、私キリヤ・スタンデンです。日本名は御田安子よ。」

「こちらこそはじめまして。私はルメリ・ミサリです。残念ながら日本名はないですが」

「あ、そうなの・・・ところで傷とかは大丈夫？」

「おかげで大丈夫でした。ザックスさんに助けてもらい」

「よかった。ところで私は時空変術師というんだけどあなたは？」

「私は剣術師です。」

「もしよかつたら昼ご飯だけでも払わせてください！！」

とお礼をしたいルメリ。

「え？いいの？」

とザックスとキリヤが言う。

レストランで。

「いや〜満腹満腹 もう困ることはない！！」

と幸せそうに言うザックス。

「ほんと〜何日ぶりかしらこんな食事」

と同じくいうキリヤ

「本当にさつきは助けて頂いてありがとうございます」

というルメリ

「ところでなんで2人は旅をされているのですか？」

と聞くルメリ

二人は一瞬だまりキリヤが丁寧に説明をする。

1年前だった。

当時は戦争が起きていて、俺たちみたいにイギリス国籍を持ちながらも日本人である人間は小さい頃全て兵器に変えられた。

そんな兵器が昨年、使われた。トップがザックス・アンドレスをはじめ、沢山の兵器が戦争へと行った。

ザックスは最後まで生き残るものの相手に抑えつけられピンチだった。

「もうだめだ・・・ これで終わりだ」

「さようならみんな・・・ さようなら仲間よ」

もう覚悟はできていた。自分はこれで良かった。ここまで生きていてよかった。

そんな中最後にこんな言葉を思い出したんだ

「もし、ザックスが助けてほしかったら私が助ける！」

「もしね、ザックスが死にそうになったら私も一緒に苦しむ！」

なぜかふと思い出した。この言葉は幼馴染で恋人でもあったマリ・フランデット。

最初は冗談だと思い聞いていたがなぜこの時に思い出した。

俺はもう死ぬかもしれない。

でも思い出せて良かった・・・

・・・

俺はなんとなく目を開けてみた。

「生きてる・・・」

そして前で倒れている人がいる。

「まさか・・・ そんな訳ないよな・・・」

「おい、お前は・・・ マリじゃねえよな・・・」

俺はどうしても信じたくなかった。前で倒れているのはマリだということを。

そしてマリは最後の力を振り絞り俺に言った

「私。。。言っただよね。。。あなたに。。。」

「ああ思い出したよ。でもお前なんでここに・・・」

「私。。。あなたが逝くのがいやなの！！怖いの！！」

「何を言っているんだ？そんなの誰だって嫌だ 誰かが逝って嫌ではないわけがあるか！」

「うん、わかっている。。。でもあなたは特別なの」

そしてこれが最後だったんだ

「わ。。。わた。。。し。。。の。。。分も。。。い。。。き。。。て。。。そして。。。い。。。つ。。。ま。。。で。。。も。。。」

彼女は息を絶えた。

俺は怒りなのか苦しみなのかわからないが体から何かが出ようとしていたんだ。

この後はあまり覚えていない。話を聞く限り俺は相手が切り刻まれるぐらい暴れまくり倒れたそうだ。

目が覚めたら病室

俺はすぐに思った

「マリ。。。マリはどこに。。。」

「残念だが彼女は息を取り戻すことができなかった」

医者は言う。

「そ。。。そんな。。。」

俺はすぐにあいつのところへ向かった。

最後にあいつの顔を見たときは何か微笑んでいるように見えた。

そのあと俺は半年ほど部屋を出ず、誰ともしやべらなかつた。

しかしある日俺にいい情報が入った。

俺たちは「日系英国人術師会」というグループに入っている。そこ

のグループは俺たちを管理してくれたり世話などをしてくれる。その中のボス カリック・ジヨムは俺を呼び出した。

「ザックス。お前、もし死んだ奴に会えるとしたらすぐにその行動を行うか？」

「……はい。」

「その行動が例え厳しくてもか？」

「……はい。」

「その行動をお前はなしとげれるか？」

「……はい。」

「もし、俺がそんな情報を今、この手でつかんでたら行くか？」

「……はい。」

「ならば、お前に任務を与える！ お前はこれから旅をし、旅を製はできたら 好きな願いをかなえられる任務を任命しよう！」

「……はい。……え？」

「なんだね？ やめるのかね？」

「今、なんて？」

「お前に特別任務を与えと言ったのだ」

.....

「へえそうだったのですか。」

とルメリは驚きながら言う

「まあボスの言ってることは本当か知らないがな」

とザックスはバカに言う。

「もう！！ここまで来たんだからそういうこと言わない！！」

とキリヤは言う。

「ピピピピピピピ」

ルメリの携帯電話が鳴る

「あ、すみませんちよっと電話に出ます」

「はいもしもし？」

「オマエノチチオヤワアズカッタ カエシテホシケレバオマエノ

ウリヨクライタダク」

コンピュータのような日本語がスピーカーから聞こえた

「え。。。お、、、お父さん!?!お父さん!?!」

- END -

2話 お父さん

「お、お父さん!？お父さん!？」
慌てるルメリ

「おい、どうしたんだ？急に慌てて？」
とザックスは問いかける。

「そ、その・・・今電話があつて・・・」

3人は急いでルメリの家に行った。

「お父さん!？」

とルメリは叫びながら家に入る。

しかし、そこには誰もいなかった。

手紙においてあったのは

「キヨウ 16:30ニ カリテリックダイガクマデコイ」

「なんだこれは？」

「と・・・とりあえず急ぎましょう!」

というルメリ

カリテリック大学

「きつとあいつらの目的は私たちの能力です。」

と言うルメリ

「ああそうに違いない。あいつらは今俺らの力をとても必要としている。」

と言うザックス

「よし、行くぞ!」

「ちょ、、、ちよっと待ってよ!ザックス! ちゃんと打ち合わせしないと!!--!」

と叫ぶキリヤ

そういいながら3人は大学の中へと入っていった。
そうすると急にザックスが走るのをやめた。

「ちよつとー なんで急に止まるのよ？」
と聞くキリヤ

「いや。。。その。。。どこに行けばいいの？」

「ガクツ。 だから打ち合わせするって言ったじゃないの！」
コン コン コン コン

向こうから人が来る音がした。

「いやいやー 打ち合わせなんてする必要はございません。 二つまで来て頂いたら私どももわかりますので」
と現れた一人の男

「てめえ・・・」

「おつと、いけませんでした。 名乗るのが先でしたね。 私はイギリスカリテリック大学名誉教授の渡辺 わたなべ 武と申し上げます。 もうご存知だと思われませんがあなた達の能力の作成も私が手伝いました。 そしてこのイギリスを世界一の国にしようと思つたのです。」

「わかつた。。。 とりあえず話は聞くからルメリの親父をかえせえ」
急に怒り口調に変わったザックス。

「あなた達の目的はやはりそうですね。 しかし、簡単には引き返すことはできません。 あ、難しいことはもちろん言いません。 とても簡単でシンプルです。」

あなた方の能力を頂くだけです。」

と、呟き渡辺武は急に襲いかかってきた。

「つち・・・」

とザックスはダークバリアで2人を守る。

「お前ら逃げて親父を探せ！」

と叫ぶザックス。

「っふん。所詮この能力を作ったのは私も入っているのです。あなたが私に勝てるわけではない！」

「なら、本気でかかってこいや・・・」

と言うザックス。

とザックスは攻撃を繰り返して行く

「あなたは・・・闇術師要するにザックス・アンドレスですね。あなたの能力は触れたものを全て闇の道具にしソードの威力を倍以上にすることもできる。そしてなんと^{ダイクボール}いつでもあなたの得意技は闇玉。

」

「だから。。。それがどうしたっていうんだ」

「どうもこうもありませんよ、私はあなた方の能力を全て把握しているのですからね」

「でもよお、お前さん能力を把握してるだけで勝てるのか？」

「はい？」

と質問するザックス。

すると、ザックスは相手の影を踏み

「応用すればお前を動けなくすることもできるんだあ」

「な・・・なんだと?。。。」

「ふふうん お前が知らない俺の能力もある。俺は確かにお前らのモルモットになったあ・・・ けどとお そしておめえらは俺らに特殊能力というものを入れイギリスの力にしたあ。しかも英国系日本人を限定になあ。。。 そんなてめえらが俺らの能力を奪う権利があんのかあ？俺らはてめえらのおもちやでも兵器でも実験器具でもねえ。」

一人一人が能力を持つ人間として生きてるんだよお！」

と、ザックスは渡辺の顔面を殴り、渡辺は倒れた。

その頃

「はあはあはあ」

「やっぱりいない・・・」

「どこにいるのおとーさん！」

と探す2人。

「ここが最後の部屋だわ 懸けましょう。」

「ええ」

と二人は扉を開けた。

「お、おとーさん！！」

そこにはひもで手足を縛られ倒れこんでいる男の人がいた。
息はあつた。

・・・

「ザックス？あんた傷とか大丈夫なの？」

「ああこんなの全然大丈夫だ。」

「ところであの犯人の正体は誰だったの？」

「ああ、どうやら俺らの能力を作ったやつでもあるらしい」

「そうなんだあ」

と話すザックスとキリヤ。2人はこの街を出ていこうとしていた。

「さてと、次の町はどれくらいかかるんだ？」

「そうね、2日ぐらいかしら？」

「シヌウ・・・」

その時後ろから声が聞こえたんだ。

「あのーっ ちよ、ちよっと待ってくださいーい！」

ん？と振り向く二人。

「ああルメリ！どうしたの？そんな荷物で？」

「そ、その。もしよかったら。。。そのたびにお付き合いさせてください！」

「わ、私もつと能力を活かして強くなりたいんです！」
とルメリは言う。

最初は驚く2人だったが

「ああ 全然かまわねえぞ！」

というザックス。

「でもお父さんとかはいいつて言ったの？」

ルメリの家。

「ねえお父さん。もう大丈夫？」

「ああ大丈夫だったぞ、まあ事件の内容は覚えていないがな。助けてもらったあの子たちには助かったよ。」

「あのさ、相談があるんだけど」

「なんだ？」

「その。。。私 あの人たちと旅をしたい！」

「!?!」

「ダメかな？」

「お前がそうしたいのならそうしなさい」

「え。本当に？」

「ただし、これだけお父さんと約束をしる。1つ けがをするな。」

「当然でしょ！心配しないでよ」

「2つ 死ぬなよ」

「自分のことを第1に気にするって！」

「3つ・・・」

「え？」

「また俺に顔を見せれるようにするんだ・・・わかったな。」
少しぼーっとするルメリ。

「う。。。うん！」

3話 暗い街（前書き）

この内容はフィクションであり、名前などはすべて架空の物です。自己紹介を忘れていました。霸王樹です。空想で考えた小説をそのまま書いておりますので時々意味が不明になります。ご了承ください。

また感想なども是非下さい。宜しくお願いします。

3話 暗い街

俺たちは改めてルメリを加え旅を続けていた。

こんなことを思い出しながら

あの日のことだ。

俺たちは戦争中に兵器としてイギリスに使われていた。

ヨーロッパのいろいろな所を巡り人を殺し、イギリスが一番上になるうとしていたんだ。

「また、行くんだよね？戦争に」

と俺に言うマリ

「ああ、そうなんだよ。いったいいつになったら終わるんかな。」

「そうね。きつとしばらく続くと思うわ。」

・・・

二人は黙り込んだ

「ねえ、戦争つて全く罪を無い人を殺すんだよね？」

「そうだな。」

「じゃあザックスももしかして・・・」

「・・・」

「おーいっ ザックス！そろそろいくぞ！」
と教官からの命令

この時俺は何も言えなかった。

その日は最悪な日だった。そう、今でも忘れられねえ。

「今日こそ、お前らの動きを止めてやるうじゃねえか クックック
ッ」

と笑う 相手の一等兵 名前はわからない。

あいつは能力者だった。

どんな手を使ってなったかは知らないが、あの時の衝撃は今でも覚えてる。

「さあてとはじめようかな・・・」

俺はその合図と同時に壁へ貼り付けられた。

そのあと殴られたり蹴られたりし、俺は能力を出すことが出来なかった。

そして。土止めを刺されるはずだった。

「ねえザックスったら！」

「うわああ」

「どうしたの？ボーっとして？」

「いや、なんでもねえよ。」

と言っキリヤ

「そうですね。今日はなんかおかしいですよザックスさん」

と俺に話しかけてくるルメリ。

「おお、なんでもねえよ 聞いてたっつてば」

と俺は話を聞いてたふりをする。

「じゃあ どっちの町に行く？」

と二人は俺に質問を投げかけてくる。

「どっちでもええわ！」

結局俺はこの女二人が行きたい街とは全く違う街を提案し、そこへ行くことにしたんだ。

「ていうか、この街なんにもないじゃん ほらガイドブック見てよ

「！」

「しらねえよ」

とキリヤと話す。

「そうですね！ザックスさん。どうみてもこの街寂れているじゃないですか」

「寂れている方が意外とおもしろいかもしれねえぞ」と、訴えつけてくるルメリ

そうすると前から何かかやってくる

「おい、おめえら 静まれ」

「えっ？」

と二人は首をかしげた。

「はあはあはあ」

そうすると向こうから男一人が息を切らせながら走ってくる。

「あ、あれ？あれはザックス兄さん？」

とその男は声を掛けてきた。

「お、お前はテイトじゃねえか。」

とザックスは話す

「はあはあはあ 良かった。本当に良かったです。」

「あれ、テイトじゃないの？どうしたの こんなところまで」

とキリヤは話しかける

「とりあえず事情は後で話しますのでどうか向こうの街までついてきてください。」

「え。。。え。」

「

と4人は街へと走って行った。

ハイコンチアル町

「はあはあはあ」

と4人は息を切らす

「ここかあ 町は っておい。なんだよこの暗さは」

とザックスは問いかける。

「そうなんです。僕もはじめ来たときはびっくりしました。住民に聞いてみますとこの街は何者かに襲われこんな状態になったそうです。」

「でも、住民なんてどこにもいなさそうよ。」
とキリヤは問いかける。

「ええ、僕も一生懸命探してその住民を見つけました。しかし、もうほとんど体が弱っていて」

「でも、そんなことなぜしたのかしら」
とルメリは疑問をつぶやく

すると一人の男が町の向こうから歩いてくる。

「気をつける」

とザックスは注意する。

その男は片手に斧のようなものを持ち

「し・・・しんにゆしやを・・・はっ・・・はっけん」

と今でも死にかけのような声で叫んだ。

すると街の向こうからたくさんの方が武器を持ちながらやってくる。

「おい、お前ら、こいつらは何の罪もないただの被害者だ。ほどほどにやれよ」

とザックスは命令をし。

「わかった」

と3人は言った。そして3人は襲ってくる人のもとへと走って行った。

- e n d -

3話 暗い街（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

4話 失敗作と成功作（前書き）

小説に出てくる名前などは実際の物と全く関係がありません。

今回もよろしくお願いします。

4話 失敗作と成功作

くあらずじく

亡き恋人を探すために旅立ったザックス・アンドレスとキリヤ・スタンデンは途中、ルメリ・ミサリと出会い一緒に旅をすることになった。3人は英国系日本人で、生まれたときにイギリス側の人体実験により体内に特殊能力を入れられていて戦争の兵器として使われていた。旅の途中テイトというザックスの友人に出会いテイトを3人は助けることにした。待っていたのは暗く寂れていた街。そして呪われ襲ってくる町の住民。3人が探しているのはその呪った犯人。見つけられるのか？

第4話」

「よし、抜けれたぞ！」

「みんな大丈夫？」

「ああ、なんとか通り抜けれたようだな」と4人は安心する。

「しかし、犯人はどこにいるんでしょうか？」とテイトは質問を投げる。

「そうだなあ。よし手分けで探すぞ」

といい、4人は探しにいった。

・・・

・・・

「はあはあはあ 駄目だ。どこにもいねえな」

「ぜんぶ。。。探したつもりだったんだけど はあ」

「よし、よく考えるんだ。探していないところを。」

と4人は息を切らせながら考え始めた。

「うーん。。。」

「もしかして遠くから制御していたりして・・・」
とるめりは言ってみる。

「いや、もし仮にこれが術ならば近くからしか制御はできません。」
とテイトは答える。

そうすると4人はまた黙り込み考え始めた。

「そ。。そういえばあの小さな小屋が気になるわ。」

と、キリヤはいう。

「なんでだ？」

と3人は疑問に思う。

「あの小屋、古い食器棚しかなかったの。しかも壁の真ん中に。ねえ？ちよつと気にならない？」

とキリヤは説明する。

「それもそれでおかしいな。ちよいいてみるか」

とザックスはいい、4人はその小屋へと向かった。

・・・

・・・

小屋に着き入ってみた。小屋は1部屋しかなくそこまで広くなかった。

そしてキリヤのいってた通り、食器棚がポツンと何かを隠すように置いてあった。

「やっぱりなにか怪しいですね」

とルメリはつぶやく。

「テイト。動かすぞ」

とザックスは言う。

「了解でし！」

とテイトは叫び食器棚を動かす。

ガガガガ

ガガガガ

すると食器棚が隠してあったところから地下へと続く階段を見つけた。

「わあ、本当にあつた・・・」

とルメリは驚きを隠せなかった。

「よし、いくぞ　あまり時間もないしな」

とザックスはいい4人は地下へと進んで行った。

・・・

・・・

地下通路はコンクリートで囲まれていて電気もついていなかったからまるで外とはぜんぜん違う感じだった。

「久しぶりにこんな明るい場所を見たような気がするな」

とその瞬間に横からシャッターが閉まった。

「おい。。。なんだこれは・・・」

とすると、前のシャッターだけが急に開きある女が前から歩いてきた。

「あら～勝手に人のアジトに入るなんていい度胸ね。お姉さんはそういうことあんまり好きじゃないけどね」

「何よ！この女！そんなあんだってドンだけひどいことしてると思っているのよ？」

とキリヤは抵抗する。

「おい、お前やめろよ」

とザックスは言う。

「あなた勘違いしているみたいだね、私は確かにこの街を使って実験しているのよ。あなた達みたいな失敗作よりもいい兵器を作るためにね！」

「く……く……くつそ……」

と殴りかかるうとするキリヤを止めるザックス

「おい、やめる」

「だって……」

そしてザックスは前に立つ

「お前は今俺たちのことを失敗作と言ったな。」

「ええ、昔の頭の悪い科学者が作った失敗した兵器よ、私はそんな失敗作よりも強い兵器を作ったこの国に認めてもらうの。だってこんな失敗作を作った科学者でもイギリスに認められたのですから。」

私の名前はアナ・クロイアル 将来、イギリスで有名になるから名前でも覚えておいた方がいいわよ。」

狭い地下通路に緊張感が走る。4人は「失敗作」と言われ怒りでいっぱいになっている。

「失敗作失敗作…… 僕たちがどんな思いで戦争に行き どんな思いでここまで生きてきたと思っっているんですか!? あなたは人間をものだと思っているのですか? 確かに僕たちは戦争に使われた兵器なような物です! でも一人の人間でもあるのです! 失敗作だろうが成功だろうが人間なんですよ!？」

とテイトは怒鳴る。

「そうねえ 一応人間としては認めてあげようかな。じゃあねえ 今日君たちに新しい兵器を見てあげるわよ。この兵器はねあなた達と違ってなんでも言うことを聞いてくれるの。いいでしょう? さあ、始めるわよ?」

とアナは言い奥からたくさんの大群がやってきた。

「な、な、何よこの数……ありえない……」

とルメリは言う。

「さあて私の最新兵器を見上げてあげるわ！　まずはこの失敗作を粉々に切り刻むのよ！」

「くっ。。。。」

ザックスは自分のダークバリアで3人を守る

「お前らあ　これは結構厳しいぞ、気を付けるんだ！」

そして4人は新兵器と戦いに出る。

- e n d -

4話 失敗作と成功作（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
是非評価もよろしく願います。

5話 「**真実は**」(前書き)

ここに出てくる名前などは全て実際のもとの関係はありません。

次回の更新は本日の23:00頃を予定しています。！

5話 「真実は」

アナが作った兵器は本当に俺たちを命令通りに切り刻むように戦ってきた。

俺たちは攻撃を防ぐことしかできずに攻撃はなかなかできない。

「ウェーブボール！」

「（へえ、テイトさんって電波を使うんだ いけない、私も自分を守らなきゃ！）」

とルメリは思った。

ザックスは闇術、キリヤは時空変術、ルメリは剣術、テイトは電波術を使い戦っている。

キリヤは時空を自由に操り攻撃を防いでいた。

「（時空変術ってこんな風を使うんだ）」

とまたルメリはぼーっとしていた。

・・・

・・・

「ぐはっ・・・」

と最後の新兵器は倒れる。

「さてと、最後はお前のみだぁ」とザックスは先頭に立つ。

「つち・・・ 失敗作がここまでやるとは私の計算間違いでしたか
しら。」

「計算間違いかはしらねえが、お前に一つだけ言うておく、

俺らは失敗作でもいい、兵器でもいい。

でもよお 人間には違いねえんだ。おめえと同じ人間だあ。

俺らは小さいころから悲しい思い出を持っている。もちろん科学者
だろうがなんだろうがしらねえがそいつらのせいだな。

俺らはイギリスのために英国系日本人が実験器具として使われたり
兵器として使われたりとした。

もちろん命を落としたやつもいるんだあ。

もう こんな思いをさせたくない。それが俺たちの願いでもある
んだ。

いいか、良く聞け。

今すぐここでその実験をやめこの街を開放するか、ここで俺たちがぶち殺すか。

選べ。」

「っふ。

おもしろ失敗作さんですね。

私だって最初は怖かった。

あなた達みたい小さな子を死んでもおかしくない実験に使ったなんて。

でも、私はそれに成功してしまったの。

そしたらね、イギリスはたくさんの子どもに同じことをさせるんだと作戦を立てたの。
正直私だって耐えきれなかった。

でも、私も実験を繰り返していくとだんだんそんな気持ちもなくなってきた

子どもが実験で死んでもしょうがないな。って思って。

そんな自分が怖かった。

もう死にたかった。

でも今日あなた達に気付かされたの。

こんなひどい実験をされたのに、

同じ人間として扱ってくれて。

私なんか。。。私なんか。。。」

「わ。。。わかります。

あなたのその気持ち。」

とルメリは話し出す。

「私だって。私だって今でも忘れられないほどの悲しいことがあります。

もちろん 私が特殊能力なんて使えなかったら、こんなことにならなかったって。

でも、特殊能力があったから守れたものもあるんです。

戦争中私のお母さんは逃げようとして歩いてたところ相手の兵士が能力でお母さんを狙ったのです。

私は急いでお母さんのところへ駆けつけました。私はその時少し傷ついたけど、もし特殊能力がなかったら

もっといろんな人を失ってたと思って。」

「そういう訳ですよ。アナさん。あなたは死ぬ必要なんてないんですよ。」

どうか、今すぐこの街を解放してください。」

「……」

・

・

そして、アナは警察に保護され罪を受けることになる。

俺たちはすっかりと明るくなった街へ戻った。

町の住民がお礼にと宿まで貸してくれた。

翌朝。

「ふう 良くねたあ。 さてと、少し遅れたが旅を続けるか！」

とザックスは張り切っている。

「ねえザックス、あんたさ疲れていないの？さすがね」とキリヤは呆れた口調で聞く。

「そりゃ、ザックスさんですもんね。」

とルメリはぼそりとつぶやく。

「おいおい、お前それどういうことだよ。 オレなんかしたか？」

と笑いながら平和が訪れたように話している。

「ところでテイトは？」

「さあ。 テイトさん朝からどこかに行ってしまったようです。」

「あいつ、なんか挨拶していけばいいのによ。」

とザックスは言う。

「さてと、宿を出ますか。」

とルメリは言う。

すると入り口にテイトが旅の道具を持って立っていた。

「ぎ。。。ザックスさん!!」

「へ?」

とザックスは急に言われたので驚く。

「ぼ・・・僕を 旅の弟子として 連れて行ってください!」

「はあ?」

「ぼ・・・僕 昨日のザックスさんの話を聞いて 改めて感動しました!」

「え?」

「ど、どこか亡くなった恋人に会うまで一緒に連れて行ってください!」

「ああ、べ。。。別にかまわんぞ。。。」

とザックスはテレを隠して言う。

「もうザックスたら テレが見えてるよ」

とキリヤは言う。

「と、ところで？テイトさんの本名はなんですか？」

「あ、言うの忘れてましたね。 テイト・ハル です。 日本名は
春山 はるやまた 泰斗たいてうです。」

これからよろしくお願いします！」

そして新たにテイトを加え新たなザックスの旅が始まった。

「ところでさあ ザックスうゝ次、私はこの街に行きたいんだけど
？たくさん服とか売ってるのよ？」

「ちょ・・・ちょっと待ってください！！ キリヤさん！ こっち
の街の方が食べ物とかおいしいんですよ？」

「ザックスさん！ こっちはメイド喫茶があったり、アニメグッズ
とかいっぱい売ってるんですよ？」

「ザックス！」

と3人が叫ぶ。

「うゝん そうだな。・・・ 最近俺には萌えが必要な・・・」

「ゴン！」

キリヤとルメリはザックスの頭を殴った。

そして新たなる旅へ。

- e n d -

5話 「**眞実は**」 (後書き)

ありがとうございました。

6話 坂見原（前書き）

名前などは実際の名前と全く関係ありません。

今回もありがとうございます。

6話 坂見原

新たにテイト・ハルを加え旅に出たザックスたち。

彼は今日も森の中。4人は一番近くの街に泊まることを決めて歩いて行った。

そして宿についた4人だった。

「よし、ついたぞ。」

「ほんとうかれたあ」

とルメリは言う。

「てなわけでな。今日はオレ用事があるんだ 悪いがな3人で行動してくれ。」

とザックスは言い

「どこかいくんですか？」

「ああちよつとな。じゃっ 今日の夜には帰ってくるぞ」

とザックスはいい街を後にした。

「ザックスさん今日はどうしたんですか？」

とルメリはキリヤに話しかける。

「実は今日がマリの命日なの。だから街へ行ったの」

「へえそうなんですか」

「もう1年経ったのか」

とテイトがつぶやいた。

・
・
・

ザックスはすぐにあの時の場所へと向かった。

それは1本だけ大きな樹木があったはずだ。

忘れやしないだろう。あの場所を。

そしてザックスはその場所へとたどり着いた。

「はあはあ。。。」「
と息を切らせていた。

「久しぶりだな。俺も色々頑張ってるぞ。いつか会えることを
楽しみにしておけよ。」

とザックスは誰もいないはずなのに独り言のように喋っていた。

5年前だった。

俺はイギリスの日本人学校に通っていた。

「はい、今日は転校生を紹介します。坂見原さかみはら 有理ゆうりさんです。」

俺たちにとって女の転校生っていうのは珍しかった。

大体、女はインター校などに行っていたからだ。

「さ……さかみがはら ゆうりです。」

と自己紹介してた。

「^{ザックス}海藤の前の席に座ってください。」

「よ、よろしくね」

とマリは俺に言ってくれた。

その特別に俺は恋愛感情なんて持っていなかった。

そしてある放課後だった。

「なあ海藤、坂見原ってさ特殊能力持っているのかな？大体、こことてあれだろ？特殊能力者が集まる学校」

と友人は話す。

「しらねえよ。なんかもってるんじゃないの」
と当時の^{ザックス}海藤は話す。

「じゃあさ、検証してみない？」

と友人の悪ふざけに乗った俺も今ではバカだと思っている。

「海藤！まずはあいつの靴の中に画びょうを隠しておくんだ。きつと特殊能力があればそんなのもすぐわかるだろう。」

「へ？それっていじめじゃねえか？ただの」

「それがおもしろいんじゃないか。」

と二人は話す。

「じゃあ海藤！お前画びょうかくして来いよ」
と友人が言ったが

「おい！てめえ　そういうのってお前がやるんだろ？おい！」

と海藤は怒鳴る。

「じゃあさ　もしやってきてくれたらあのゲーム貸してあげるよ」

と友人に言われ俺はまんまとつられた。

そして俺は下駄箱に行き画びょうを坂見原の靴の中に入れた。

友人らはそれを隠れてみていた。

と、するとそこに坂見原が歩いてきたんだ。

「あ、こんな時間までいるの？」

と聞かれ

「あああ　そ、そ、その掃除サボってたから・・・」

と言いごまかした。

「お、、オレ急いでるから・・・ね・・・じゃ
「ねえ 待って!」
と坂見原は話しかける。

「あなた特殊能力持ってるわよね?」

「え? とくしゅのうりょく? ああ持ってるけど・・・」

「私と勝負しようよ」

「え?」

「じゃあ 午後8時に校庭ね。遅れたら画びょうの事先生に言うか
「ら

といい去っていた。

「勝負って女らしくねえな」
と俺はつぶやいた。

午後8時

「一応10分前に来たが・・・本当にいるのか?」
と俺は言った。

その時だった
「ヒューーン」

「うわぁぁ」

急に前から光の玉が飛んできた。

「あなた海藤って言ったよね？ 戦場にきたら勝負は始まっているのよ。」

「てめえ殺す気か？危なかったじゃないか」

「そんなの関係ないわ、あなたの能力を見たいの」

「お前は光術師か・・・ ふっん 俺と正反対ってところか」

「どづいづことよ？」

「手加減しねえぞ 勝負なんだから 俺の力を見るんだな」

と海藤はいいダークボールをくりだした。

「なるほどねえ そういう術師さんだったんだ。ならばこれでもくらえー！」

坂見原はライトソードをくりだし、海原はダークソードをくりだした。

「さすがに攻撃はお互いに当たらないものなのね。」
と坂見原は言う。

「命がなくなっただけから泣いてもしらねえぞ」

と海藤はいいダーク・インパクトという技を出した。

しかし、相手の光には効かず……

「ド」
「ン」

「はあはあはあ……」

「はあはあはあ……」

「お互い生きているのか」

「みたいね」

「なかなかやるじゃないか 女のくせして」

「あんたこそ、私の攻撃を……。ここまで止めるなんて。。。」

「っち、 立てるのか？お前」

「って…… バカにしないでよ！そこまで傷ついているわけじゃないし、立てるわ。。。うわっ」

「ほんとに お前無理するんじゃないぞ。 はい、手」

と、この日は終わったのだ。

そして中学の頃だった。

「おい、坂見原はどこに行った？」

「それがわかんねんだよ。」

「あいつ 俺が必要なときはいつもいないんだからな・・・」

とザックスは友達と話す。

「お前。。。前から思っていたがそんなに坂見原の事が好きなのか？」

「好きだと？ あんな狂暴女のことをか あんなやつを恋人にしたら大変なことになるわ。」

「しかし坂見原のやつなんか大事な仕事があるって言ってたぞ？」

「ふうん なんか気になるな・・・ちよい先生に聞いてみるわ」

職員室

「先生、坂見原はどこにいったのですか？」

「おい、お前 ちょうどいい時に来た。 冷静に聞くんぞぞ。・・・」

俺は急いであいつのところへ向かった。

先生は

「坂見原は何者かに連れ去られた」と言った。

「つち、待ってるよ」

「言われた場所だとここだが」

俺は辺りが静かなのに不思議に思った

「少年君 ここだよー」

と後ろから声が聞こえナイフで背中を刺された。

「くっそ……」

「君はあの娘を助けにきたのなかなく？」

「そうだよ……」

「さあてと そんな体でそんな娘を助けに来たのかな？ はははは、無理でしょう無理無理」

「ちっ てめえらしい加減にしる。」

「（海藤……）」

と坂見原は心の中で叫んだ。

「ふん、 いかてめえよく聞け 『ザックス・アンドレス様の参上だ！』」

辺りはザックス・アンドレスに反応し静かになった。もちろん彼女

も。

「ザックス・アンドレスですか あのランキング2位の 強そうです
すねー」

「いいか 俺はな 坂見原を殺したりしねえよ だからてめえらに
指1本ともふれさせねえ」

「（渡しを守っているのあいつ？ 何言ってるの？）」

と言い、ザックスはダーク・インパクトを投げ込んだ。

・・・

・・・

「っていう話もあったの〜」

とキリヤは話す。

「いろいろとあったんですね〜」

とルメリはいい

「ま、この話も本当にごく一部ですが。」

とテイトも言う。

「ふう ただいまー」

「ほら噂をしたら帰ってきた」

とキリヤは言う。

「さてと、今日はちと、おいしいレストランでも行くかー！」

とザックスはいい、

「なんか今日はテンションが違いますね」
とテイトは言う。

「うるせえ　ひと言余分なんだよ！」

「はははははは」

- e n d

6話 坂見原（後書き）

もしよろしければ感想などもよろしくお願いします。

7話 お嬢様（前書き）

名前などは実際の団体・個人名とはまったく関係ありません。

今回の続きは明日深夜2時ごろに更新します。

よろしく願います。

7話 お嬢様

第6話。

俺が街に帰ってきた後も俺たちの周りでは何もなくこの街を後にする事にした。

旅の終点まではだいたい100kmぐらいと短くなっていた。

「このペースでいくとあと3ヶ月ぐらいか」とザックスは言う。

「ていうか、そこにいくだけでマリに会えるの?」

とキリヤは質問をする

「うーん 詳しく聞いてないが、どうなんだろう」

とザックスは答える。

「その話ですけど、どうやら僕たちの旅次第で決まるそうです。どうやらそこに人は人の記憶を扱う能力を持っているそうです。できちんと歩いていかないと、いけないらしいです。」

とテイトは言う。

「ひえー そいつ怖いな・・・」

とにぎやかに話しているうちに4人は次の街、コリカというところについた。

街はとても都会で人口も多い街だった。

「うわぁーすごいですね、この街 都会ですよ!都会! 私たちが見てきた街とぜんぜん違いますうー」

とルメリは言う。

「とりあえず、俺はマサオナルドっていうハンバーガーの店にいき」
「あそこ世界では有名らしいぞ」

とザックスは叫び

「えーっ 私はスナーボックスというコーヒー屋に行きたいです。とルメリも叫ぶ。」

「はあ あんた達 田舎者だねえ、そんなところ私なんか・・・」
とキリヤは途中で話をやめる。

「どうしたんだ？」
と3人は聞く。

「いや、なんでもないわ・・・」

とそのとき向こうからスーツ姿の男が4人程やってきた。

「お帰りなさい、お嬢様」

とスーツ姿の男は言う。

「おい、てめーら 何者だ？ 早く離さないと・・・」

「ザックス、この人たち私の知り合いなの。」

とキリヤは離す。

「え？」

・・・

・・・

「あ、今晚には戻るからね。 ちょっと待ってて」

とキリヤは事情を話し、スーツ姿の男に連れて行かれた。

このスーツ姿の男はキリヤの執事とかだったのだ。

どうやら俺たちの街から急にいなくなったのを知って執事たちが探していたんだ。

「キリヤさん、お金持ちのお嬢様だったんですね。」
とルメリは言う

「まあなでも、別に学校の時も一緒だったがそんなにお嬢様みたいではなかったがな。。。」「
とザックスは昔を思い出す。

「キリヤさんきつと帰ってきますよね。絶対に」

とルメリは聞くが。。。

・・・

・・・

「久しぶりの家ね」

とキリヤは一人でつぶやく

「お嬢様 お父様がお呼びのようです。」

「そう、行くわ・・・」

- e n d -

7話 お嬢様（後書き）

もしよければ、感想・評価を宜しくお願いします。

8話 判決（前書き）

話の内容はフィクションであり、人物などの名前は全て実際のもとの関係ありません。

今回もありがとうございます。

なんか調べてるとダークマジシャンってゲームで実際にあったりして・・・

もしかしたらタイトル変えるかもしれませんが、このまま行きたいと思います。

感想などもよろしくお願いします。

8話 判決

第8話

トントン

「失礼します。お父様」

私は父さんの部屋へと呼ばれたので入った。

父さんは大手企業の社長。そんな人の娘だったけど私の父さんもイギリスにはさかえられず、人体実験をされた。それから、お父さんは私のことなんか気にしなく、小さい頃はお父さんに会えるのなんて1週間に1度程度だった。

食事も別で、休日は執事たちとお出かけ。

そんな日々は楽しくなかった。

私は小学生になってから親戚の家で暮らすことになった。学校に行くためだった。

親戚の家は今までの家とは全く違ってとても明るく、執事もついてこない、自由に遊びに行ける。

そんな自由な生活をしていた。でも、父さんとはそのあとからほとんど会うことがなく時々、親戚経由で父さんの様子を聞いていた。

そんな父さんが、今 私を呼びたした。

「キリヤ、久しぶりだな」

「ええ、そうね お父さん。何年ぶりかしら、こうやって話すなんて」

「もう、そんなことは忘れた。」

何か父さんの様子がおかしい、私は思った。

「お前、なぜ父さんが呼び出したかわかるか？」

「なんとなく、想像つくわ。」

「父さんは9年前に確かに親戚の家へと送った。もちろん学校に行かせるためだった。」

それもしようがなくな。ほとんど反対していたが母さんはどうしても行かせたいと」

「ええ そうだったわね。」

「それで、俺は先日 お前が住んでいるところへ行ったんだ」

「!?!?」

まさかあの父親が!?!? あの父さんが 私のところへ来るなんて思ってもいなかった。

「しかし、お前はそこにいなかった。詳しいことを聞くと、男と

「一緒に旅に行つたとな」

「な、なによその言い方。 私は、別に その男がもく・・・」

「そんなことはどうでもいい、むしろ聞いてもいいない。 もちろんお前のことだから男の2、3人はできることぐらい知っている。」

「な。。。 なによ。」

「父さんは そつちよりも お前を旅に行かせることを許可したことはない！！と言っているんだ」

「・・・」

「確かに、お前は私から離れて自由になったかもしれん。 しかし自由の範囲ぐらい考えてもらいたい。」

「・・・」

「私は、お前に特殊能力を持たせたことを今後悔しているんだ。 あの時、私がイギリスに反対していれば・・・ お前もこんなことにならなかつただろう。」

「・・・」

「でも、後悔しても先には進めない。 だから父さんはお前を呼び出したんだ。」

「・・・」

「そして、父さんは今から言う選択をお前に決めてもらいたい。」
「・・・」

「いいか、聞くんだ。 1つは もう一度ここに帰ってきてきちんとやり直そう。 2つは もし、戻れずに旅を続けるのなら ここで死んでもらおう。」

「!?!」

その言葉に驚いた。

なぜ、私が・・・なぜ、私が命を懸けてこの家に戻らないといけなの？

と最初に思った。

「ちょ、ちょっと待って!?!お父さん なんで。。。なんで死ぬの？私が・・・？」

「もう、お前を危険な目には合わせたくない、そんなのは見たくないからだ、ならばお前が死ねば・・・ここで全て終われる。と考えたのだ・・・」

これが親の責任・・・と私は言いたかったが言えなかった・・・
「おい、キリヤ 決めてくれ。もちろん お前が死んで俺は嬉しいとは思わない。」

もう、その質問は選択なんてできないと思った。

もちろん・・・ 死にたくない・・・ でもまだザックスたちと旅

を続けたい……

「どうすればいいの……」

と私は小声で叫んだ。

……

……

私は部屋に戻され考えてみた。

もちろん、ここで死んだらばかばかしい。でももうこの家なんて戻らないと決めたんだ。

という思いが混乱していた。

「もう、会えないのかな……」

その頃ザックスたちは……

「いや、これがアメリカンハンバーガーっていう味か、本当うまかった」

とザックスは言う。

「しかも安かったですね随分と ジュースとチップス（ポテト）が ついて8ポンドぐらいついて」

とテイトは言う。

「ねえねえ スナ バックスのコーヒーもおいしかったでしょ？あれこそアメリカンコーヒーですよ。」

とルメリは言う。

「ええ？あれってアメリカンコーヒーなのか？」

とザックスは質問する。

「そういえばさ、キリヤまだ帰ってこないね。」

もう 夜8時になっていた。

「なあーに 心配することはねえよ。 久しぶりに父さんに会って
帰りたくないんだよ。」

とザックスは心配を消そうとする。

「そっか・・・」

とルメリは納得する。

・・・

「・・・」

とキリヤはまだ悩んでいた。

そして、私は父親の部屋へと向かった。

その時偶然廊下に、弟のトムが歩いてた。

「あ、姉さん！帰ってたの？」

「あ、うん。」

トムはギリギリと実験が終わったと同時に生まれたので特殊能力は持っていない。

「姉さん。話は聞いたよ。姉さんはもちろん死なんか選択しないよね？」

「！？う。。。うん」

と私の考えを変えさせようとしていた。

「姉さん・・・」

とトムは抱き着く

「僕、もう人が死ぬなんて嫌だよ・・・」

「うん。。。。」

と私は軽くうなずいた。

・・・

・・・

そして私は父さんの部屋へとついた。

トントン

「どつぞ」

と扉の奥から声が聞こえた。

「父さん、私は決めました。」

「そうか、さっそく聞かせてもらおう」

「しかし、その前に父さんに頼みがあります。」

「なんだ？」

「もう一度 あの人たちに会わせて下さい。」

「・・・」

父さんは一瞬黙り込んだ。

「ダメだ、今あつてしまうと別れはつらくなる。」

「そうですね、それは残念です」

私は素直に答えた。

「他には？」

「特にはないです。」

「ならば聞くつ」

「わかりました。・・・」

- e n d -

8話 判決（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

感想などもよろしくお願いします。

9話 後悔（前書き）

ここに出てくる人物名などは実際の物とは全く関係ありません。

これでキリヤ回はおわりです。

いつもありがとうございます。

9話 後悔

9話

「私は決めました」

「聞かせてもらおう」

「ここで死にます」

「!?!」

その答えは父さんも驚いていた。

「な。。。なぜだ 理由を聞こう。」

「先程、お父さんも言った通り私には自由がないんです。自由がなく縛り付けられた人生なんて誰一人楽しいと思わないでしょう。ですから私は自由が欲しいんです!」

「・・・そうか」

「これが私の答えです。」

「よし、キリヤ この家の中で残りの時間を楽しむんだ、 さあ部屋から出る!!」

とキリヤは出て行った。

それをこっそりと聞いていた弟のトムは

「姉さん・・・」

トムはその後、その少年とあった執事を探し回り、今 その少年がどこにいるかを探していた。

「ねえ？知らないの？ どこで姉さんを見つけたの？」

「そんなこといわれても・・・」

とトムは一生懸命と探していた。

・・・

・・・

ピンポーン

ピンポーン

ピンポンピンポン

ピンポンピンポン

ガチャ・・・

「うるせえんだよ！この野郎！てめえ何時だと思ってるんだ？はあ？」

とホテルの廊下に声が響く。

「うう。。。」

そこにはトムがいた。

・

・

「っていう訳なんです！ですから助けて下さい！」

まだ夜中の3時だった。みんな起きて今の現状をトムから聞いた。

「そういう訳か・・・」

とザックスは言う。

「だから、どうか協力して下さい！」
とトムは訴える。

「ところでトム君？ 私達普通にお屋敷に入ったら警備員に見つか
るんじゃないの？」
とルメリは聞く。

「大丈夫です。そういうことがあると思って・・・」

・

・

朝6時

警備員は全員出勤の時間だった。

ザックスたちはトムから借りた警備員の制服を着てゲートを入ろうとした。

「はい、ID見して。」

と門番の人は言う。

戸惑う3人

そこにトムがやってきて。。。。

「おい！その門番！ お前、昨日仕事サボっただろ！」

と急にトムは怒鳴り出した。

トムは

「（この際にゲートを抜けて！）」

というアイコンタクトをだし、俺たちは無事入れた。

トムはそのあとザックスたちと合流し、

「ここまでではどうにか成功です。IDも偽造しておきました」

「あなたなんでもできるんですね」

とテイトは言う。

「いえいえ、余裕ですよこんなの」

とトムは自慢する。

「って、こんなことはどうでもよくて本題はここからです！ 姉は本日父さんにより射殺されるそうなんです。ですが時間はわかりません。姉次第です。」

「おいおい、本当にそこまで話が進んでるのかよ？」
とザックスは質問する。

「うん、早くしないと・・・」
とルメリは付け加える。

・・・

「おはようキリヤ。」
と父さんは話しかけてきた。

「おはようございます。」

「今日が君の命日になるなんて思いたくないが、それでいいのか？
まだ間に合う。」

「父さんがそう言う考えならそれでいいんです。 私はそれで」

「そうか」

と父さんはいい、消えて行った。

「（もう、私はこれでよかったんだよね。 もう会えないんだよね・・・）」

とすぐそこにザックスたちがいたというのにそんな気持ちだった。

「(さあ 遺書を書いて いつ死ねばいいのかな・・・)」
私はうつ病の患者みたいになっていた。

・・・
・・・

「という訳で何か新しい情報が入ったらこの特殊無線でお伝えします。」

「ああなんかスパイごっこみたいになっているがまあいいかとザックスは答えた。

「ねえザックスさん、きっとキリヤさん考えを変えてくれますよね？」

とルメリは聞いてきた。

「・・・ あいつ、1つの事を決めると変えれないやつだけどな・・・」

とザックスはつぶやく。

ザックスはつぶやいた後、急に走り出して姿が見えなくなった。

・・・
・・・

正午12:00

私は父さんの言われたとおりに誰もいない地下室の少し広いところへ行った。

そこには父さんが一人と私だけ。

私は部屋へと入った。

3人の執事が私の手と足をひもで結び体を壁にくっつけられた

「よし、お前らは出る!」

「鍵を閉める。」

と父さんは私に言った。

「キリヤ、私は昨晚までいろいろと考えたがお前は考えずにこの答えを選んだ。」

お前の考えは良くわかった。

でも、今日でお前の楽しかった今までの記憶を消すのも嫌だがここでお前を離すのも嫌である。

だから一緒にこれから楽しい思い出を作ろうとしていたのだがお前はどうやら乗ってくれないようだな。」

と父親は私の胸元を狙い銃を構えていた。

・・・

その頃、お屋敷の中は執事や警備員の中でもうすぐ射殺されるとい

う話しかなかった。

「ザックスさん」

と二人は急にいなくなったザックスを探している。

と、そこにトムがやってきて

「もう時間がないんです！ 行きましょう お二人さん！」

とトムに連れて行かれた。

・・・

「もう覚悟はできているな キリヤ」

「・・・」

「私は今日までの日々があまり楽しいとは思わなかった。お前と一緒にご過ごした時間が短かったからな。」

お前がいなくなっても私はお前に特殊能力を組み込ませたことを後悔するだろう。」

「・・・」

「もう 親失格だ。 ありがとな・・・」

キリヤ・・・

この時思ったの、私の日本名は親につけられた名前じゃなかった。親戚につけてもらった名前だったの。

だからこの人は知らない。

なんで、最後にこんなこと思ってるんだろう。

私、ザックス達にまた会えるかな……

バン……

と銃声がした。しかしその銃声は銃の大きさと比べると音が大きすぎていた。

『あれ、私……』

とキリヤは生きていることを確認した。

「おいおい、何自分で 親失格とかいってるんだよお？ 娘殺す前から親失格だったらよお お前、なんなんだあ？

親じゃなくて 犯罪者だなあ……」

と聞きなれた声を聞いた。

「(ざ……ザックス?)」

「まあよ 親失格な奴に人生縛られてまで、この家に住みたいなんて思っやつは相当なバカだよなあ……」

「!?!」

と父さんはなにも言えなくなっていた。

「まあそんなバカじゃないやつを親失格なやつに殺されるなんて、俺はゆるさねえぞ。」

「お前はいつたい誰なんだ? ……どうやって入ってきた……?」

ドン!と扉があく音がした。

「お父さん! 僕が誘導したんだ! この人たちを!」

とトムが言う。

「な……。なにを……」

「キリヤさんは 僕たちと一緒に旅をしてきた友人です。なのに
そんな人に殺されるなんて 僕は許しません。」

とテイトは言う。

「そ、そうよ！ 私も選択を選べるなら同じことを選ぶわよ！」
と続いてルメリは言う。

「というわけだ。 ザックス・アンドレスが参上した理由だあ・
」

私は涙を浮かべていた。

私を守ってくれる人がいて。。。こんなに楽しい人生があるって
いうのに・・・

「さてとお、ダメ親父さん。 お前は自分がしたことが分かっているよな？」

自由にしてあげなかったとか・・・

それでお前があげた選択肢はここに住むか死だ。

自由にしてあげるといふ選択肢を与えなかったダメ親父はどうい
う訳か説明してほしいなあ。」

「うち・・・ たくさん言われてしまいましたね、ガキにと。 こ
んな友人を持つてるキリヤは本当に変わってしまったそうですね。」

「ザックス・アンドレス。 ここで私を殺してください。 そうす
ればすべてが終わります。」

どうか、娘のためにも息子のためにも・・・」

と父さんは話す。

「そうかあ。。。それでいいんだなあ。後悔しないんだな？」

とザックスはいい

「ええ」

と父さんは答える。

「ならそこでおとなしくしている。」

とザックスは父さんの影を踏み動けなくした。

そしてザックスはダークボールを打とうとしたが、私は思わず叫んでしまった。

やめて――――

ドーン

壁から煙が出ていた。

（お、お父さんは・・・）

お父さん――――

と私は言ってしまった。

煙の中から出てきたのは傷一つないお父さんとザックス。

「お前はなあ 離婚して、誰にもかばってくれず 信頼もされなくなつてとうとう自分のことをダメおやじだと思い、娘を遠くまで送つたが。

後から後悔していたんだよなあ。

そして、息子まで遠くに行つてしまい、とうとう一人ぼっちに。

しかしよお親父さん。 今、そんなお前が死ぬのを嫌だと思つた人がいるんだ。

そんな中の1人の娘をお前は殺そうとした。

そんなんじゃ 本当にひとりぼっちになつてしまつてたな。

お前はただ一人になるのが怖くて娘を呼び戻した。

そうだろう？

そしてここに残るか死ぬかを選択肢として上げた。

でも娘は死を選択した。

もし、お前が殺していたらもつと後悔していただろう。

そうじゃねえのか？」

「くそ……」

「俺だって今まで後悔して生きてきた。」

もちろん死ぬことも考えた。」

でもよおその後悔はまだ取り戻せると俺は信じている。」

だから俺は前へ向いて進める。」

そう思っている。」

「おい、キリヤ お前親父になんかいうことねえのか？」

「あ、うん……」

とキリヤはうなずく

「お父さん、 わ、私を この人たちと旅をさせてください！」

「……」

「ああいいだろう。その代り元気でこの人に着いていくんだぞ。」

そして……

……

また気が向いたら帰ってこいよ」

・・・

・・・

「てなわけでザックスさん！そして皆さん 今日ありがとうございます
いました！

ほんの少しですがお食事を出させてください。」
とトムは言う。

「お。。。おしよ。。。お食事って。。。これ。。。超金持ちが。
。。。食べる料理じゃ。。。」

「ははは、何言ってるんだい？ザックス君 今日私達からの感謝
のプレゼントだよ」
とお父さんは話す。

そこには超豪華な料理などが並んでいて、とても贅沢な気分だった。

「い。。。いただきまーす！」
と3人は声を合わせ言う。

「いやぁ これうまい もう美味すぎる。」

「こんなの。。。毎日食べれてたら。。。幸せ。。。」

モグモグ

「なんだよ。。。あの某ハンバーガー店の何千倍もうまいじゃない
かモグモグ。。。」

「ちょっとあなた達、そんなに急がずにゆっくり食べなさいよ
本
当にもう……」

とキリヤは言う。

「キリヤ。旅は楽しいか？」

と父さんは聞く。

「ええ この人たちとだから楽しんだもん。」

「そうか。元気でやるんだぞ。」

「うん。」

- e n d -

9話 後悔（後書き）

もしよかったら評価と感想を宜しくお願いします。

そして、次回は本日の23時頃を予定しています。

10話 カセットシティ（前書き）

この内容に出てくる登場人物の名前などは実際の物と全く関係ありませんのでよろしく願います。

今回も読んでいただきありがとうございます！。

是非感想などもお待ちしております。

10話 カゼットシティ

第10話

俺たちはあの後、キリヤの家から車で街まで送ってもらった。

そして準備をし旅へと戻っていった。

・・・

「さてと、だいぶ遅れてしまったがチェックポイントまではあともう少しだ！」

とザックスは言う。

「え、チェックポイントって何ですか？」

とルメリは聞く。

「ああ、なんかゴールまで行くには3つのチェックポイントに行つてサインとかをもらわないといけないらしい。」

とザックスは答える。

「まあ街まで軽くあと1時間半だ！」

・・・

カゼットシティ

「この市長にサインをもらいに行けばいいらしい」

とザックスはいい、

「市役所はこっちにあるって言ってましたよ。」

4人は市役所へと向かった。

「申し訳ございません。市長は朝から出ておりまして、まだ帰ってきていないのです。」

と市役所の人は言う。

「そうですか・・・ それじゃあまたきま・・・」

とザックスは言おうとした瞬間

「あの・・・ 旅をしている方なんですよね？」

と、市役所の人はいい、

「ああ そうだけど。」

「実は市長、朝から外へ出っていて、まだ帰ってきていないのです。何かに巻き込まれたかと」

もう夕方6時を回ろうとしていた。

「市長は南の山の家に行くと言っていました きっとそこにいると思われるのですが」

俺たちはすぐに向かった。

市長のみに何かあったらと思いきいで向かっていくつもりだったが、

「う。。。。きつい。。。」

「な、、何よこの山」

「き。。。。きついです。」

と3人は言うなか

「みなさん、何しているんですか？急がないと日が暮れますよ？」
といいながらテイトはどんどん歩いていく。

そして山頂の家についたが

「まだ市長さんはここに来ていませんよ 朝には来ると言っていたが」

「そうですねありがとうございます。」
とルメリは丁寧に挨拶する。

「来ていなかったみたいです。 あれ、みなさんどうしたんですか？」

とルメリは報告するが

「いや、なんでもないよ さっきね、テイトがとてもしやな予感がするって言ったの」

それでザックスとテイトは先に行っちゃったの どうする？私たちも行く？それとも戻る？」

「。。。行きましょう 私たち4人でチームなんですから！」

とキリヤの質問に答える。

「あ、！ どうやらルメリさんたちも動いたようです」とテイトは言う。

「なんでわかったんだ？」

とザックスは聞く。

「僕の電波が時空の変化を読んだのです。」

とテイトは答える。

「へえすげえなおまえら、電波が時空の変化を読むのなら お前ら結婚したら便利だな」

とザックスはいい、

「な、なに言ってるのですか？ 僕は そんなストーカーとか、近くににいるから安心するとかそんなことはまったく・・・」
テイトはあわてながら言う。

「はいはいわかったわかった。」

とすると急にテイトの表情が変わった。

「ザックスさん、近くに誰かいます。 しかも急にそこへでてきました、」

「!？」

とすると後ろから声が聞こえた。

「おやおや、その人たち。よい子はもう寝る時間だよ。」

もしかして、君たち、旅人さんかな？

僕ね、このたびをしている人が嫌いだから、ここで消えてもらいたいんだ……。」

と言った瞬間、その男は飛び掛かってきた。

グサッ

グハツと、男はテイトの肩を大きな爪のような物で傷をつける。

「テイト!!」

「さてと、そこのお兄さん。もうわかってるかもしれないけど、市長を誘拐したのはこの僕です。」

なんでかわかるかな？」

「お前はいつたい何者だ？」

「僕は、この特別な爪を使って攻撃する特殊能力者ですよ。」

そう、君たちと同じだね。」

「爪だと？」

「まあ、剣術師ともいわれるけどね。正確に言えばこの爪を使う訳

さ。

僕はね。昔、君たちと同じ旅に挑戦したことがあるんだ。

だけど、僕は途中で仲間を亡くしてこの旅を終わらせなければならなかったのさ。

この旅のチャンスは1回だけ。それがルール。だから僕はもうで
きなないんだ。

僕はこの旅を成功させるものを作りたくない！この旅を君たちに成
功してもらいたくない。

だから僕は君たちを殺す。そして、この旅の成功者を出さない！

そう決めたんだ、だから僕は市長を使って君たちをここに呼び出し
たのさ。

僕はジャーミー・ジョン

名乗ったからには君たちを跡形なく刻んでやる」

と言うとジャーミーは爪で襲ってきた。

「俺は・・・ザックス・・・アンドレスだ！」

とザックスはかわしながら言う。

「もう・・・名前を・・・聞くだけで・・・わかったかもしれんが」

「お前も同じ同類ってことだな・・・ククク」

とジャーミーは言う。

「さあ殺そうか・・・今日でお前らは終わりだー！」

・ e n d ・

10話 カゼットシティ（後書き）

感想などもお待ちしております！

11話 罪

第11話

「ぐはっ。」

ザックスはバランスを崩して転んでしまった。

「さあ終わりだ、ザックス君 ははは」

キーン。

「勝手に終わらせてもらったら私も困るね、ザックスにはたくさん借りを作ってしまったもん。」

とキリヤは剣で爪を切り、ザックスを守った。

「時空変動、相手の動きを封じ込む」

とルメリはいい、動かさないようにした。

「あなたにはザックスさんを殺す権利はありません。」

「お、お前ら・・・」

とザックスはいい、

「テイトの事は任せて あとはヨロシク」とキリヤは言う。

「わかった」

というとザックスは立ち始め

「さてとお 改めていくが お前俺のことを切り刻むと言ったな、しかし それはどうかな・・・

俺が旅を成功しようか失敗しようか関係ない、 お前が俺の旅を成功させるか失敗させるかも関係ない。

だけど、旅を邪魔するのは違うだろ？

その言葉を今から撤回させよう

『ザックス・アンドレスの参上だ。』

と言い、ザックスはダーク・インパクトを打ち始めた。

しかし、

「あれあれ、 ランキング5の中の3位さん。君の力ってこんなだったの。」

へえ、ランキング1位さんを倒した時のビデオよりもあんまり強くないね。

まあ、こんなクソみたいなやつに負けた1位もどうかと思うが「

」・・・」

「じゃあ俺の出番と行きましょつか、お前の言ったことも撤回させてやるよ」

グサッ

とザックスの肩を剣がすれた。

「あれあれ？なんで動かないの？もしかして考え込んじゃった？

僕ね 爪が無くても剣があるんだ。まあこれが本当の僕ってところかな。」

「……」

「お前、ランキング1位と言われるやつとどんな関係なんだ」とザックスは聞く。

「まあ簡単に言ったら……」

君を狙った共犯者だよ。

僕は君を殺す理由は2つあってその中の1つが 『僕の手で君を殺す』

なんだ」

「マリを……マリを殺した共犯者か……」

「はあ？誰だそいつ？」

「てめえには関係ねえ。　そんなら俺もお前を殺す理由がある。

俺の大事なものを奪ったからな・・・」

「お前、人1人の死を気にして生きてきてるのか？　もしかして旅もそのため？」

「なんだよ、それ　もっと面白い願いなんてねえの？　世界征服とかさ・・・」

ブシューウウウ

とザックスはダークソードで相手の肩に少し傷を入れる。

「これで同じだあ。。。　さあ本気で行かさせてもらおうか・・・」

「おもしろそうだな」

・・・

・・・

「とどめだ。　はあはあ　剣術師君。」

「それは僕のセリフだよ　闇術師君。」

「それじゃあとおきな技を見してあげよう。」

ほれ、動いてみるよ、お前」

「何を言ってるんだい？闇術師 くん。。。 あれ？体が・・・」

「そつだ。。。 お前の影 しっかりと踏ませてもらったよ。」

「ひ・・・卑怯な・・・」

「ダーク・インパクト！！！！！！」

ドーーーーーン

それは、ジャーミーには当たらなかったのだ

「あなた、なぜ私を殺さなかったのでしょうか。」

「簡単だあ。 お前は何も罪を犯していない。」

だから俺はお前を殺すことはできない。

さらに、俺は人を殺したいなんぞ思ってもいないからな。

もうすぐ警察が来るだろう。 お前はそこで傷の治療でもしてもら

いな。」

と言

「おい、お前ら早く市長連れて帰るぞ、 あとジャーミー お前ら
0分ぐらいその態勢にしておくから。」

・・・

・・・

ジャーミーは無事に警察に保護され、俺たちは市役所へと戻った。

「いやいや、今回は本当にありがとうございます。サインはもちろん宿も用意しておくよ。」

と市長は言う。

「ありがとうございます。」
と4人は礼を言った。

病院

「テイト！」

と言いザックスは入る。

「ああザックスさん。無事市長は助けられましたか？」
とテイトは言う。

「もちろんだ。お前こそ大丈夫なのか？」

「ええ 3日ほどで大丈夫だそうです。」

「そうか、それはよかった。」

「それじゃあ また次からがんばろうな。」

「はい。」

· d n e ·

12話 スマートフォンを持っていなかったら時代遅れなのか？（前書き）

この小説に出てくる人物などの名前は一切実際のものとは関係ありません。

今回も読んでいただきありがとうございます。

12話 スマートフォンを持っていなかったら時代遅れなのか？

第12話

俺たちじゃジャーミーとの戦いを終えた後、無事に市長からのサインももらい次の街へと歩いていった。

「ザックスさん。このあいだのジャーミーっていう人はどうやら5年前に旅を始めたらしいですが一緒に旅をしていた仲間が途中で死んで旅を終えなきゃいけなかったそうです。」

それでそれ以降は誰にも旅を成功させたくないと言いたくさんの人を妨害していたそうです。」

とテイトはザックスに言う。

「へえ。そうなんだあ。てかよ、そんな情報どこからだよ。」

とザックスは質問する。

「ああこれですよこれ、今話題のe P h o n eです。」

「スマートフォンe P h o n e?」
とザックスは聞き返す。

「ああ今話題のスマートフォンっていうやつね。なんかいろいろと便利なんですよ?」

どこで買ったのですか?」

とルメリは言う。

「このあいだの街です。あそこの電気屋に行ったら残り1個だと言ったので買ってしまいました」
とテイトは言う。

「（な、なんだ スマートフォン？ ePhone？）」

とザックスは心の中で思う。

「ああ私も ePhone 欲しかったな！。でも、ePhone が出る前にこのフルキーボード付きの携帯買ったんだ。」

とキリヤは見せる。

「（お、おい お前いつからそんなの持ってたんだ。）」
とザックスは心の中で思う。

「あ、それってホワイトベリーっていう携帯ですね。海外で人気のあるやつ。」
とルメリは言う。

「そうそう、なんかトムがプレゼントって言ってこれくれたんだ。また使い方は良くわからないけど」
とキリヤは答える。

「私も、ガラケーってよく言われるやつですけど持っています。旅に出るときにお父さんが買ってくれました。」

「(え、何それ？ガラケー？　まずなんだそのコンピューターみたいなやつは？)」
とまたザックスは心の中で思う。

「ザックスは携帯持っていないんだっけ？」
とキリヤは言う。

「別に携帯なんてもってなくてもいいだろ！むしろ俺にはそんなもの必要ないな・・・　なんだ？ゲーム機か？それともトランシーバーか？」

とザックスは焦りながら言う。

「ザックスさん、もしかして携帯を知らないのでは？」
とテイトは言う。

「ゴクリ」

・・・

「へえ携帯電話っていうのか・・・」

とザックスは説明を聞いて納得する。

「あんだ、携帯も知らなかったなんて、最近では小学生でも知っているのよ。」
とキリヤは言う。

「ところで、テイトさん そのePhoneって地図とかも出るのですよね？次の街まであとどれくらいですか？」

とルメリは聞く。

「（地図？え、時間まで？なんてすごいものなんだ・・・）」

とザックスは心の中で思う。

「えつとですね、このペースだと2時間ぐらいですかね。」
とテイトは答える。

「ねえテイト！それってさ、星座の位置とかもわかっちゃうんですよ！なんてロマンチック〜」
とキリヤは言う。

「（星座の位置だって？なんでだ？なんで？）」

とザックスは心の中で思う。

「わかりますよ、最近のGPS機能というやつで人工衛星から自分たちの位置を分析し、星の位置などを確認することが出来るのです。」

とテイトは言う。

「（うち・・・なんてハイテクな物をもってるんだ・・・）」

とザックスは心の中でいう。

「（もしかして、このePhoneがあったら・・・）」

妄想タイム。

「うわあ〜すごい〜ザックス〜 今話題のePhone持つてるなんて〜」

「なあすごいだろ、これ今日の星座なんて見ることもできるんだぜ。」

「うわあ〜超ロマンチック〜 ねえザックス、海が見えるところに行きたいな」

「そうだな。この地図機能を使えば海の見えるところなんて簡単に行けるさ！」

「さあePhoneとともに！俺たちも幸せをつかみにいこうではないか！〜！」

ピピピピピ

「うわああ」

と携帯の着信音と同時にザックスは妄想から帰ってきた。

「あ、メールだ。え、何これ？ 『このメールを5人に回したらあなたの願い事が叶いますよ。』だって〜」

「えーすごい！回そう、あ ルメリ達にも送るね〜。」

とキリヤは言う。

「あ、ありがとうございます。」

とルメリは言う。

「あ、ザックスは持っていなかったんだ、残念。」

とキリヤは言う。

「どうせ、俺なんか・・・」

とザックスはすねる。

「ま、行きましょ！次の街へと！」

とキリヤはいい　メールを確認した後4人は次の街へと向かった。

・・・

・・・

「なあテイト、次の街まであとどれくらいだ？」
とザックスは聞く。

「そうだなあ、後軽く1時間ぐらいですかね・・・　うっ・・・
とテイトは言った後倒れこんでしまった。

「大丈夫？・・・うっ・・・」

キリヤとルメリも倒れこんでしまった。

「おい！大丈夫か？おい、テイト！キリヤ！ルメリ！」

ブウウウウン

「おい、少年！ そいつらを乗せるんだ！
と突然通りかかった車から声が聞こえた。

「だれだ？」

とザックスは聞く。

「俺はお前らを誘拐なんぞするつもりはない。とりあえず黙って乗るんだ。」

そいつらの命を捨てたくないのなら。」

- e n d -

12話 スマートフォンを持っていなかったら時代遅れなのか？（後書き）

もしよろしければ、感想・評価を宜しくお願いします。

題名を決めました。

「ダーク・マジシャン 〱親愛なるあの人へ〱」

13話 メール(前書き)

この小説に出る人物名は実際の名前と関係ありません。

もしよければ感想・意見などを宜しくお願いします。

13話 メール

13話

「俺はお前らを誘拐なんぞするつもりはない。とりあえず黙って乗るんだ。」

そいつらの命を捨てたくないのなら。」
と声をかけられたザックス。

「ガチャ」

と山道を走っていた車は近くの街へと行った。

「俺はザックス・アンドレスだ。お前は何者だ？」
とザックスは言う。

「俺はダディ・ソイル。同じ英国系日本人だ。今はイギリスの大学に行っているいと研究している。」

「そうか。しかし、なんでこいつらは倒れてるんだ？」
とザックスは聞く。

「俺も原因不明だが、街に出ればきっとわかるだろう」

ライドシティ

「な、なんだこれは……」
とザックスは驚く。

「どうやらこの被害は世界で起きているらしい。まだ原因はわからないが、何か全員に共通点があるはずだ。」
とダディは言う。

ガチャ。

「とりあえず、ここが俺の大学だ。そいつらを連れてこい。」
とダディは言う。

「（少しぐらい手伝えよ）」
とザックスは心の中で思う。

「おい、大学の人も倒れているのか・・・」
とザックスは言う。

「どうやら本当に世界中でみんなが倒れているみたい」
とダディは言う。

そう、テレビをつけてもラジオをつけても何も流れていなく、街は指で数えられるぐらいの人しかいなかった。

「ダディ！原因が分かった。」
と唯一倒れていない研究員が言った。

「どれだ。なるほど・・・そういうことだったのか」
とダディは言う。

「おい、何が起きたんだ？」
とザックスは聞く。

「これは集団テロと言ってもいいだろう。原因はこの情報端末、携帯電話だ。」

とダディは言う。

「携帯？なんでそんなものが？」

とザックスは聞く。

「このメールが原因だ。」

とザックスは印刷されたその画面の写真を見る。

メールの内容は

『このメールを5人に回すとあなたの願いがかないます！さあ今すぐ受信して3時間以内にメールを送りましょう。ak safkda sokdawufjoasdjoadkfoaodfadofa』

と、メールの本文の後に暗号のようなアルファベットが書いてあった。

「なんだこれは？」

とザックスは聞く。

「どうやら、世界中でこのメールが送られたみたいだ。」

とダディは言う。

「おい、原因はどこになっている。」

とダディは研究員に聞く。

「インターネットがダウンしていてわかりませんが、いろいろ調べているとUKだとは分かりました。」

「イギリスか、、、よし、すぐにわかったら地図を送れ！俺らは

いろいろと街を回ってみる。」

・・・

ザックスとダディは車に乗り走り出した。
しかし。。。

「ダメだ、これ以上動けない、車が全く動いていない。」
とダディは言う。

「みんな倒れているのか？」
とザックスは言う。

「ああ 環状線がダメなら下道を通るか。」
とダディは聞く。

「ところでなんでお前らは倒れていないんだ？」
とザックスは聞く。

「・・・ いや、そのどうやら俺たちにある共通点は携帯電話を
持っていない、もしくはメール機能がついていない携帯を持っている
ということだそうだ。 お前も携帯持っていないんだろ？」
とダディは言う。

「・・・ 確かに俺も携帯持ってないわ。」

「いまどき携帯を持っていない人は珍しい。しかも世界中でな。
そして、こんなデマなメールがすぐに広まるといって、怖い時代だ。」

とダディは言う。

と言っていると、車のナビが何かを受信した。

メッセージに

『ダディ！このメールの発信元が分かった。地図を送っておく。』

と書いてあり地図を受信した。

「っち、環状線を使えば30分というところだが下道を使うと2時間ぐらいかかりそうだ。」

とダディは言う。

「ついていこうじゃないか」

とザックスは言う。

・・・

「この古いビルが発信元だそうだ」

とダディは言う。

「準備はいいか？お前にこれを渡しておこう。」

とダディは聞く。

「銃か。俺がふれたものは全てダーク色になるんだぜ。準備はいいぞ。」

とザックスは言う。

そして2人はビルへと入り込んだ。

ドーン。

とザックスは扉を破壊する。

「へえ、闇術師か。お前本当のザックス・アンドレスなんだな。

さすがランキング5に入っているぐらいの威力だな」

とダディは言う。

「ダディ・ソイルって氷術師のダディアイス・マジシャンだろ？しかもランキング5のとザックスは言う。

「ま、そういうことだ。これが終わったらぜひ勝負させてもらいたいな。本当の1位を決めるために。」

とダディは言う。

「望むところだ」

ということとで2人は入っていく。

・・・

「つちこの部屋にもいない。」

「ああもう全部見たがどこにもいない。」

「最後の部屋はここだ、いいか？」

「ああ」

ガチャ。

そこはコンピューターモニターが20個ほどあった部屋で、そこに一人の男がいた。

「およおや、君たち何者かい？　なんで倒れていないのかな？　もしかして、メールが届かなかった人とか？」

「残念ながらそんな携帯というものは持っていないんだよ。」
と、ザックスは言う。

「へえ、時代遅れさんなのね。まあ見る限り術師ってところかな？　君たちは。」

と男は言う。

「ああその通りだ、お前は何をしようとしているか分からないがその大きなテロを止めてもらおうか。」
とダディは言う。

「まあ、止められないことはないけど、どうやって止めるのかな!？」

と言うと男はダディに襲ってきた。

「ダークインパクト!!！」

と言い、攻撃を止めた。

「ほお、ダークインパクトか・・・」
と男は言う。

「俺の名前はな蟹田 康太^{かにだこうた}だ!!　剣術師だ!」

と今度はザックスに襲ってくる。

そしてザックスは攻撃をかわしたつもりだったが、蟹田は剣をザックスの肩らへんに突き刺した。

「ぐはっ。」

「ふうなかなかやるじゃねえか」
とザックスは言う。

「おいおい、ここからは俺の出番にしてもらおうか。」
と言いダディは氷で剣を2つ作った。

「ザックス！お前がふれたものは全てダーク色になるんだろ？それならこれを使うんだ。」

「ふん、なかなかよくできてるじゃないか。」
とザックスは言う。

「うおおおおおおお」

とザックスとダディは蟹田へと襲っていった。

しかし蟹田はうまくかわして行って

「おいおい、お前らの剣術はこんななのか？はははは 笑えてくるなー」

と蟹田は言う。

「じゃあここにいたらどうなんだ？」
とザックスは蟹田の後ろにいる。

「何？はさみうちか せこいやつだな」

「グサツ・・・」

「いいか、戦いでははさみうちなんてせこくない、お前の注意力が
少ないだけではないのか。」

世界はなお前の好きなようにさせねえ。

とザックスは言ったが。

「クツ・・・」

と言いザックスは傷口が荒くなったので倒れる。

「っちこれで少しは安らんでくれ！」
とダディは氷で傷跡を凍らせる。

「ふん、やりすぎなんだよお前。 治ったら勝負だからな。 さて
と、電話するか・・・」

・・・
・・・

「ここはどこだ・・・」
とザックスは言う。

「病院か・・・」
とザックスは言う。

ガラガラ

「ザックスさん!!」
と言いテイト達は言う。

「どうしたのよ?ザックス 急に病院で倒れていて?どうしたのその傷?」
とキリヤは言う。

「ああ、少し事故にあったみたいだ・・・」
とザックスは本当のことを隠す。

「ザックスさん、心配かけないで下さいよ。本当に。」
とルメリは言う。

「そういえばザックスさん退院は1週間後だそうです。あと、これ手紙を預かってきましたよ。」
とテイトはいい、てがみを渡す。

「誰から手紙だ?」

『ザックス・アンドレスへ

この手紙を読んでいるということはきっとあなたは助かったみたいだな。

僕は傷跡を氷で凍らせ緊急処置をしたのですが、それで助かったな

らよかったな。

まあ、この借りはいつか返してもらおう。俺はせっかくお前にあったんだから勝負したいな。

ま、この事態を取り戻したのも俺がやった。ちょっとコンピュータをいじっただけなのだがな。

また、大学に遊びに来いよ。どうやらお前は旅をしているらしいが気を付けていくんだな。

勝手に死ぬんじゃないぞ。

ダディ・ソイル 日本名・高岡

雄二たかおかゆうじ

「ふっ おもしろいな・・・」

「だれから手紙なのよ？」
とキリヤは言う。

「ま、友達からだな。」
とザックスは言う。

「でもザックスさん、1週間延びたのはザックスさんのせいですか
らね。」
とルメリは言う。

「わかった分かった」

~~~~~

「あ、電話だ。」

とテイトは言う。

「ちよつと病院の中は携帯だめだよ。」

とキリヤは言う。

「ごめんごめん、ちよつと外行つてくる」

とテイトは言う。

「ザツクスさん私達またきますね！」

とルメリは言う。

「ふう・・・もお携帯なんてこりこりだな。」

- e n d -

### 13話 メール(後書き)

もしよろければ感想・意見などを宜しくお願いします。

## 14話 指名手配

### 14話

1週間後、俺は無事退院し旅を再開することになった。

「ザックス、これ入院代と治療代、そして食事代も別になっているわ、はい請求書。」

とキリヤは請求書を見せる。

「ああそれは本部に送っておいてくれ。そんなお金払う気ないからな」

とザックスは言う。

「それと、ザックスさん だいぶ前の請求書もあるのですよ?どうしますか?」

とルメリも言う。

「それも送つといてくれ。」

とザックスは答える。

そして4人は次の街へと向かった。

・・・

カイルドタウン

郵便局にて。

ガチャ。

「ザックスさん請求書を本部あてに送っておきましたよ。」  
と言いながらルメリは郵便局から出てくる。

「おうサンキュー」  
とザックスは言う。

「さてと、昼飯にするか。」  
とザックスはいい、街を歩き始めた。

するとたまたまテイトは街の掲示板を見てしまった。

「ザ……ザックスさん……」  
とテイトは驚きながら言う。

「ん？どうした？」  
とザックスは言う。

「どうしたのよテイト……って……え？」  
とキリヤも驚く。

「なんですか？二人で……うえっ？」  
とルメリも驚く

「なんだよ、お前ら そんなに驚いて 俺にも見せろ……ええええええええ？」  
とザックスは言う。

その掲示板に貼ってあった物は

『国際指名手配。』

ザックス・アンドレスをはじめとする4人の集団。  
現在最後に居場所を確認されたのはイギリスの中。



見つけたら40000£(ポンド)国から送られます。  
彼らには殺人・誘拐・業務執行妨害などの罪があります。  
と書いてあります・・・とテイトは訳する。』

「な・・・なんだこれは・・・」  
とザックスは言う。

「と・・・とりあえず人のいないところに隠れましょう。」  
とルメリは言う。

・・・

「おい、いったい何が起きたんだ。だいたい誘拐ってなんだ？俺が  
いつ誘拐したんだ。」  
とザックスは主張する。

「そ、そうよ警察に行っちゃんと説明してもらえば・・・」  
とキリヤは言う。

「ダメですよ。警察になんて行くと。僕たち下手したら死刑にな  
るかもしれないですよ。」  
とテイトは言う。

「じゃあ俺たちは逃亡するしかないというのか？」  
とザックスは聞く。

「え、どうにかならないのか？オレ逃亡生活なんていやだぞ。」  
とザックスは言うのと、向こうから声が聞こえた。

「おい、あの集団って指名手配の？」

「や、やばいぞ、お前ら逃げるぞ！」  
とザックスはいい、4人は逃げる。

「おい、このクソ泥棒まで！」  
と向こうから追いかけてくる。

・・・

・・・

「はあはあ、もうきつい・・・」  
とザックスは言う。

「軽く・・・4kmぐらい走ったわ。」  
とキリヤは言う。

コンコンコン

と向こうから歩く音が聞こえる。

「おい、ここ行き止まりだぞ・・・」  
とザックスは言う。

「もう、あきらめましょう・・・」  
とテイトは言う  
と向こうから歩いてくる人が警察の格好をしている  
ことが分かった。

プシュンと音がした瞬間、俺たちは体が動かなくなった。

「体が動かない！？　おい、お前らありがとう。今まで一緒に旅をしてくれて」

とザックスは涙を浮かべながら言う。

「もう、私たちも終わりか・・・」

とキリヤは言った瞬間。

向こうから警察の人が、

「心配しないでください。その・・・僕はあなた達を逮捕するつもりはありません！」

と警察官は言う。

「と、とりあえずパトカーに乗ってもらってもいいですが、ここは危険なので。」

と警察官はいい俺たちは怪しみながらパトカーに乗った。

・・・

「ここなら大丈夫です。」

と警察官はいい、俺たちを降ろしてくれた。

「お前、なんで俺たちを助けたんだ？警察官だろ？俺たちが指名手配ぐらい知ってるだろ？」

とザックスは聞く。

「そ、そうよ！なんでなの？」

とキリヤも聞く。

「それじゃあ僕からも質問します。あなた達はいつ、殺人、誘拐、業務執行妨害をしたのでしょうか？」

僕はあなた達について色々と過去に調べたことがあります。しかし、そんな報告は一回も受けたことがありません。まあ業務執行妨害に似たような感じなのはありましたが、それはあくまでも国のためとかなどとして報告されています。いいですか、ここからが重要な所です、よく聞いてください。」

「うん。」

と4人は言う。

「私を除く警察官と国民は全て記憶を書き換えられ、あなた達が指名手配されているということになっています。私は警察の中でも偶然、特殊能力を持っているので、そのような事にはなりませんでした。」

「なるほど、それではその記憶を書き換えた人がいるっていう事ですね。」

とテイトは聞く。

「そういうことになりましたが、その人をなかなか簡単に見つけることが出来ません。」

と警察官は言う。

「言うの忘れてましたが、僕はイギリスの英国系日本人警察官 山下 一輝です。僕もあなた達と同じような特殊能力を持っているのですが、残念ながら攻撃系能力ではないので警察に行くことになりました。」

「そうなのか、俺はザックス」

「私はキリヤ。」

「私はルメリです。」

「僕はテイトです。よろしく。」

「という訳で、あなた達に協力してもらいたいのです。もちろんわかっていただけましたか？」

「ああもちろんだ。」

とザックスは言う。

- e n d -

15話 裏切り（前書き）

これに出てくる名前は実際の物と全く関係ありません。

今回は少し少なめです。

そして今週は少し更新をお休みします、  
よろしく願います。

## 15話 裏切り

15話。

警察官の山下とあつたザックスたちは指名手配を撤回するために山下の車に乗っていた。

「おい、この車 大丈夫か？外から丸見えじゃないのか？」  
とザックスは言う。

「大丈夫です。外から特殊フィルムを貼っているのです。」  
と山下は言う。

すると、ルメリはあるものを見つけて山下に伝えた。

「山下さん。あれって検問じゃないですか？」

というとな下はすぐに前を見た。

「なんてことだ。ここまで進んでいたとは・・・」  
とザックスは言う。

「大丈夫です。この車は警察に登録されているナンバーなので、それに前に座ってるのはザックスさんじゃないので後ろは頭を隠すだけでいいです。」

「わかった」

と4人は言う。

・・・

とりあえず俺たちは山下が用意してくれた部屋に集まった。

「いいですか、みなさん、これから私がないな時に外へ出ないで

ください。約束してください。

それと私は今から出勤してきますので。帰ってくるのは18時からなので家で待っていてください。

よろしく願います。」

という山下は出て行った。

「なあお前ら。」

とザックスは言う。

「もしよ、これが本当に指名手配なら、俺は後悔しているんだ。別に俺はお前らを巻きぞいにしたかったわけでもないんだ。だから今なら、俺は罪を全て負える。そして、お前らを解放することもできる。」

お前らにも多少は罪がつくかもしれないけど、これは全て俺の責任なんだ。だからあ　これで解散にしたら・・・。」

「な・・・何言ってるんですか？ザックスさん！。私たちは一緒に旅してきた仲間なんですよ。それに私なんかザックスさんを恨んだりしたりしていません。私は、ザックスさん達と好きで旅をしてきたんですよ？」

とルメリは訴える。

「そうです、ザックスさん僕も全くと同じく。もし本当に罪ならザックスさんと同じように罪を受けます。」

ザックスさん1人責任を負うなんてさせませんよ。」

とテイトも言う。

「ザックス。私があんたを憎いなんて思ったことないよ。それにザックスと一緒に来たことを後悔なんて今でもしていないわ。一緒に頑張ろうよ。これが終わるまで。それに、私は・・・一生。。。ザ



ツクスに着いていくから……」

と言つとザツクスは

「お前ら……ありがとう……」

とその瞬間だった

バン！パリン！！

と銃の音と窓が同時に割れた。

「伏せろ！！」

- e n d -

15話 裏切り(後書き)

感想・評価をもしよろしかったら宜しくお願いします。

## 16話 友情（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

## 16話 友情

16話

トントントントン

とアパートの階段を上ってくるような音がした。

ガチャ

「よし、あいつらはここにいるはずだ。探せ！」

と声が聞こえた。

俺たちは何者かによって押入れの中に入れられた。

すると扉の外から声が聞こえた。

「おい！てめえら 人の家になにしとんじゃボケ！？」

その声は山下の声だった。

「あ！山下課長！」

「おい、なんで俺の家を狙ってるんだ！？はあ！？間違いにも程があるだろ！？  
そんなにザックスたちを殺したいならもっと違う情報を探ってとつとつと捕まえろや！」

と言つとほかの警察はこの場所を引いて行つた。

「もついいですよ。」

と山下は言つた。

「ふう、どうにか間に合つてよかったです。」

と山下は言つた。

「おい、いろいろと聞きたいことがあるのだが、殺すつてどういふことだ」

とザックスは言つた。

「ええ、これも説明しないとイケないです。今、警察の会議に行つたのですがどうやら軍隊も加わり、ザックスたちを見つけたら即殺すという話になったのです。」

と山下は説明する。

「どういふことよ!? 軍隊つて・・・軍は私たちを武器として利用したのでしょ!?!」

とキリヤは言つた。

「いや、これは何者かによる仕業と思われれます。きっと何かによつて洗脳され警察と軍隊を巻きぞいに行っているんです。」

と山下は説明する。

「洗脳・・・ 大人数による・・・ 何かにつまずくような・・・」

とテイトは言つた。

「とりあえず! 俺たちの命が狙われるとはそうとう大きいことじゃ

ねえか？どうすればいいんだあ？俺たちは？」  
とザックスは言う。

「とりあえず、僕たちもがんばりますが、洗脳されていないのは本当に少しだけの人数なのです。ですから・・・」  
と山下は言った時に

「さっきテイトさんが洗脳って言ってましたけど、このあいだの携帯事件と何か関係あるのでは・・・」  
とルメリは言う。

「携帯？あああのメールで倒れさせて・・・ってもしかして!？」  
とキリヤは言う。

「確かに、それもあるような・・・わかりました。やってみます。  
とりあえずザックスさん達は安全な場所に行きましょう!」

・・・

俺たちは車に乗り安全な場所へ向かおうとしたところ

道路の真ん中に銃を持った人がいた。

「伏せる!」

バン!!

と山下は言った瞬間車を思いっきりとカーブさせた

「うわぁ」

と4人は言う。

トントントントン

と男は歩いてくる。

「山下あ、お前はすぐに調べてきてくれ。俺はこいつの相手をする。」

とザックスは言う。

「わかりました。それとこれを持っていてください。」

と山下は無線機を4人にわたし車に乗り再出発する。

「おやおや、こんなところでお前らに会えるとは・・・本当はおめえらもう死んでたんだぜ、でもよここの警察と軍隊はカスすぎてお前らをすぐに殺せないから、僕が出てきたんだぜ。」

「お前、何者だ？」

とザックスは聞く。

「僕は、今この軍隊と警察を制御している、主要人物、さてとあなた達の周りを見て下さい。」

と男は言うつと、俺たちの周りは警察と軍隊に囲まれていた。

「さてと、あなたたちはいつ死ぬか、試してみましよう！」

と言つと警察と軍隊は銃で打つてきた

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン

「はははっは、もう死体になっているかな……」

煙から出てきたのは立っている4人だった。

4人はもう声が出ないほど倒れかけていた。

「ほお、特殊能力、ですか？」

と男は聞く。

「でも、誰ひとり殺していない。。。あなたたちの能力はそんなもんですね。」

と男は言つが

「ああ、僕たちは殺しませんよ。関係ない人を。」

とテイトは言つ。

「そうかい……。でもね、関係ない人でも人を殺せば犯人となるんですよ……」

という男はテイトに向かって銃で撃つてきた。

そして、軍と警察も同時に攻撃を始めた。



ドンドンドンドンドンドンドンドンド

ドンドンドンドンドンドンドンド

そしてテイトは電波で攻撃をふさいだ。

「どうやらあなたは特殊能力はないんですね。だからあなたは携帯事件を応用して軍隊・警察を洗脳した。そして僕たちを殺そうとしている。」

とテイトは言う。

「その通りだけど、なにかありませんかね？」

と男は言う。

「私、時空を変えられることが出来るの。」

とルメリは言う。と男と軍隊と警察は体を動かさなくなった。

「なにっ。。。」

と男は言う。

「それと私は剣術、あなたの首をすぐに斬れるわよ。」

とキリヤは男の首を絞める。

「まあ、お前は特殊能力が無いから俺たちを殺そうとしているんだろ？ だけどよ、特殊能力の本来の使い方はこんなことのためじゃね

えんだあ。それと、今連絡があつたが、軍隊・警察はお前の制御から解放された。この無線機のおかげでな。もちろんお前がこのような状態になったのも山下のおかげだ。」

とザックスは説明する。

「くそ。。。山下め・・・」

「君の名前はサン 英国系日本人だが特殊能力はない、なぜならお前の体は特殊能力を入れられる体質じゃなかったからだ」

とザックスは言う。

「そうだよ。その通りだよ。だけど、俺はこんなこともできる。この警察と軍隊を一回洗脳したから免疫が残っている。そいつらを殺すことができますよ。どうしますか」

と言うとサンは軍隊と警察を苦しめ始めた。

バン！

と銃声が聞こえた。

それを撃つたのは山下だった。

「サン、もう止めようか・・・ 特殊能力者を殺すのは・・・」

と言い、山下はサンを殺した。

「うち・・・お前・・・」

「ザックスさん、説明します。」  
と山下は言う。

~~~~~5年前~~~~~

大学にて

「それでは特殊能力をインストール不可能な人を発表します。

山下 一輝

サン・ジュリアイル

・

・

・

「

その時は信じられなかった。まさかここまで訓練などをしてきたのに俺とサンは特殊能力をインストールすることが出来なかった。

「っち、なんだよ！特殊能力って！俺たちここまで頑張ってきたのに！」

とサンは言う。

「サン、しょうがないよ、僕たち特殊能力を手に入れられなかったんだから……」

と山下は言う。

「でも一輝、そんなんじゃないよ！俺は許せないよ！いつかあいつらに仕返しするんだから！」

とサンが言ったのは今でも山下は覚えている。

そして3週間前。

俺の携帯に一つのメールが届いた。

『久しぶり！一輝 ちよっとおもしろい話があるから来てよ』

とのサンからのメールだった。

ピンポン

「おう一輝！久しぶりだな！」

「ああサンこそ。」

「さああがってあがって!!」

••••

••••

「なあこの記事見てくれよ！」
とサンは言う。

「ん？」

それは携帯事件の記事だった。

「これを使って警察を洗脳させて特殊能力者を殺そうと思ってるんだ！」

とサンは言った

「ねえサン、それって本気で言ってるの？」

「ああもちろんだ！お前も協力してくれるよな？」

俺はサンがあまりにも嬉しそうだったから断ることが出来なかった。

そして俺はサンに言われたとおりに警察連絡メールを使い洗脳本文を送った。

でも警察の親友にはできないと思わずと送らなかった。

そして、俺は2日前君たちに出会った。

僕はその時正直に話せなかったが、どうしてもこの作戦を成功させたくなかった。

だから君たちを守った。

~~~~~

「そうか。。そうだったのか・・・」

とザックスは言う。

「だから・・・僕は・・・」

と山下は言う。

「僕は一緒にサンと死にます。」

と言った

「ちょっと待ってください！なんであなたが死ぬ必要を？  
とテイトは聞く。

「だって僕は！サンを！！」

と山下は言うが

「まだ死んでないわよ。 私が止めました」

とルメリは言う。ルメリは山下が撃った弾を止めていた。

「！？」

と山下は驚く。

・・・

そのあと、軍隊・警察の洗脳は解け、サンは警察へと送られた。

山下は多少取調べされたが警察の位が下がったただけだった。

ザックスたちの指名手配も無くなっていた。

「とりあえず一件落着だな！」

とザックスは言う

「まあそうね。」

とキリヤは言う。

「ところでさ、お前ら能力が上がってるんじゃない？ ルメリなんか弾を止めていたしキリヤは瞬間移動が早くなった。そしてテイトも電波の威力が違う」

とザックスは言う。

「それはザックスさんのおかげですよ、一緒に旅をさせてもらったので」

とルメリは言う。

「まあそうかもしれないわね。」

とキリヤは言う。

「僕も気づいたら強くなってましたから」

とテイトは言う。

「じゃ、次の街へと行くか！」

とザックスはいい、次の街へと向かう。

- e n d -



## 16話 友情（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、  
評価・感想・お気に入りをお気軽にお願いします。

## 17話 ミイナ・アイル（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

もうすぐラストパートです！！

## 17話 ミイナ・アイル

17話。

俺たちは指名手配され次のチェックポイントへ向かおうとしていたが、ちょうど山下の街がチェックポイントだったので役場に行ってサインをもらい、次の最後のチェックポイントへ向かおうとしていた。

「よっしゃ〜なんやかんやいってあとチェックポイント1つじゃねえかあ〜!!!」

と大声でザックスは叫ぶ。

「本当にそうですね。でも次の街まであと350kmですけど。」  
とテイトは現実を言う。

「うわあ〜350kmってどれだけかかるんですかあ〜」  
とルメリは言う。

「まあ、しょうがないでしょ。多分この先何か起きるかもしれない・・・って・・・ねえザックス あそこ・・・」  
とキリヤは言う。

「はあ？なんだ？って・・・ 倒れてる？」

とザックスは道の真ん中に倒れている少女を見つけた。

そして4人はすぐに少女のところへと走っていた。

「おお〜い 大丈夫かい？」  
とザックスは声を掛ける。

「うう・・・」  
と少女は言う。

「まだ生きてるみたいですね。」  
とテイトは言う。

「とりあえず救急車を・・・」  
とルメリが言った後

「そ・・・それだけはやめてください・・・」  
と少女は言った。

・・・

とりあえず俺たちはその少女を連れて近くの街の病院へと行った。  
医者は軽い貧血と言ったので俺たちは安心して帰ろうとしたが、

「ちょっと君たち、どうやらあの子君たちと話がしたいらしいよ。」  
と医者は言う。

「話ですか？俺たちと？」

・・・

ト  
ト  
ト

と俺たちはノックをする。

すると

「は・・・はいどうぞ」

と声が聞こえたので入った。

「あ、どうも」

とザックスは声をかける。

「あの、なんかすみません」と少女は言ったので。

「ああ大丈夫ですよ。」とルメリは言う。

「その・・・助けて頂いてありがとうございます。でも、わたし、もう一つ頼みがあつて・・・」と少女は丁寧と言う。

「なんだ？助けられることなら助けるぞ」とザックスは言う。

「その、私のお父さんが何者かに誘拐されて・・・早く助けないとだめなのです！それで町の人に聞いてみたら、『向こうの街からとても強い旅人が助けてくれるかもしれない』と言われたので急いでその人たちに会わないと、と思い走ってきたのです。だからその旅人達を探してほしいのです。」

と少女は説明する。

「あ、私はミイナ・アイルです。英国系日本人なのです。」

とミイナは自己紹介する。

「ああ、俺はザックス。そしてこいつらは一緒に旅をしているキリヤとルメリとテイト。」

とザックスは説明する。

「え？ザックス？ ザックスって・・・確か町の人が言ってたよう  
な・・・」

とミイナは言う。

「ん？僕たちも旅人ですけど・・・」  
とテイトは言う。

「確か聞いたのは・・・ 4人組で ザックス・アンドレスがリー  
ダーって・・・ えええええええ？もしかして・・・」  
とミイナは言う

「多分そのもしかしてだね。」  
とキリヤは言う。

・・・

「それでは街まで私が案内します。」  
とミイナは言う。

ミイナは3日ほどで退院できてすぐにミイナの街へと向かう。

「ミイナ、ところでどれぐらいかかるんだ？」  
とザックスは聞く。

「えつと軽くこのペースだと7時間ぐらいでしょうか。」  
とミイナは言う。

「お前、一人で歩いてきたのか・・・ すごいな」  
とザックスは言う。

俺たちは飲み物や食料をミイナに分け合って7時間ほどかけミイナの街へと向かった。

・・・

「つきました ハアハア」  
とミイナは言う

「ああ・・・ついたのかはあはあ」  
とザックスは言う。

「それではこのゲートをくくりぬけると・・・あれ、ゲートが壊されている。」  
とミイナは言う。

どうやら敵の侵入によって町のセキュリティのゲートが壊されていた。

「そんな・・・」

とミイナは言う。

「とりあえず大変そうですね。急ぎましよう  
とテイトは言う。」

街に入るとそこはとても残酷な光景だった。

「うそ・・・町みんなが・・・」  
とミイナは言う。

「うわ・・・どうしたのよみんな・・・」  
とキリヤは言う。

「あ、誰か来た、隠れて」  
とルメリは言った。

「うち、どこにいるんだあ？ミイナは・・・あいつの力がないと俺  
たちの作戦は成功しねえのになあ」  
と下っぱのような男が言う。

「（力？こいつらが狙っているのはミイナの力？）」  
とザックスは言う。

「隠れる場所があるのでそこへ急ぎましよう。」  
とミイナは4人を連れて行った

・・・

とある地下室



「ここなら敵も来ないと思うので安心だと思います。」  
とミイナは言う。

そこは地下にできた普通の家みたいな感じな場所だった。

「ミイナ、俺はお前に聞きたいことがある。お前特殊能力を持っているのか？」

とザックスはすぐに聞いた。

「……うん、そうです。私は水術師ウォーターマジシャンです。でもその中でも水術師の上位の力だそうです。」  
とミイナは説明する。

「やはり、そうか。あいつらはお父さんを狙ってるわけじゃない、きつとお前の力を狙っているのだ。」  
とザックスは言う。

「なるほど、お父さんはただ人質にされてるわけですね。」  
とテイトは言う。

「ああ、さらにそいつらはミイナの力を使って何かをしようとしている。大きなことをな」とザックスは言う。

「じゃあ、とりあえずミイナちゃんをそいつらに渡さなければいいってことね」  
とキリヤは言う。

「でも、急がないとお父さんの命が……」  
とルメリが言った時だった。

ド  
ン

爆発音とともに地下の天井が崩れてきた。

「伏せる！」

とザツクスは叫んだ

- e n d -

17話 ミイナ・アイル（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、  
評価・感想・お気に入りをお気軽にお願いします。

## 18話 友人のもとへ（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

## 18話 友人のもとへ

18話

「伏せる!!」

と同時に天井が爆発し崩れてきた。

俺は一生懸命外へ逃げた。

「あれ、みんなはどこいったあ？」

と俺はつぶやく。

その頃ほかの3人もみんなを探していた。

「どうやらはぐれた見たいだな。」

と思った時、遠くから悲鳴が聞こえ、俺はすぐに向かった。

確かにミイナの声だった。

・・・

「つちどこへ行ったんだ・・・」

と俺は街を走り回る。

その頃

「本当にみんなどこに行ったのかしら携帯も繋がらないし・・・」  
とキリヤは歩きながらみんなを探している。

と、その時車でミイナが連れさせられている瞬間を見た。

「まさか・・・」

とキリヤは車を追いかける。

キリヤは車を追いかけると車は山の中へと入って行ったが、そのあと車は見失ってしまった。

・・・

・・・

キリヤも山の中に入りミイナの場所を探していた。

「いったいどこに建物があるのかしら、」

と探していると、山の中では不自然な感じの入り口を見つけた。

「ここに違くないわ。」

とキリヤは思い入って行った。

入り口を入ると壁はコンクリートで出来ていてまだできて間もない感じだった。

すると、奥に2人の人影を見つけた。

よく見るとそれはルメリとテイトだった。

「あ、ルメリとテイトじゃない。もう来てたんだ　おーい!」

と叫んだ時2人は私を睨んだ。

「え?」

と戸惑うキリヤ。

「侵入者を発見しました。直ちに阻止します。」  
というテイト。

「え、何よ・・・どうしたの??　うそでしょ?」  
と言うキリヤ。

「ここに無断で入ってきたからには殺します。」  
と言うルメリ。

まるで何かに操られているようだった。

すると二人は私に攻撃をしてきた。

剣でよけるキリヤ

それに対して2人は

「あなたがそういうつもりなら、私たちも本気でいきます。」  
と言うルメリ。

「うおおおおお」

キリヤはもちろん仲間のルメリとテイトを殺すことなんてできない。

だからキリヤは攻撃を止めて受けることしかできなかった。

「ちよつと・・・あんた達本気じゃない。私はキリヤよ！ねえ仲間でしょ？」

とキリヤは攻撃を受けながら言う。

「そんなのは知りません」というテイト。

それに対してショックを受けるキリヤに2人は攻撃をしてきた。

「（そ・・・そんな・・・）」

キーン

その時キリヤは攻撃を受けていないことに気付いた。

「おい、てめえ・・・もう一步俺が遅かったら死ぬところだったな。こいつらは俺が止める・・・お前は先にミイナのところへ行け！」

と俺はキリヤに行った。

「わかった・・・」

そしてキリヤは先へと走っていく。

- e n d -



## 18話 友人のもとへ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったですら、  
評価・感想・お気に入りをお気軽にお願いします。

今回中途半端の終わり方でしたが次回頑張りますorz

## 19話 戦う理由（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。

ちょっと今回は話が脱線気味かも

## 19話 戦う理由

私は途中呪われたテイトとルメリに襲われ動けなかったところをザックスが助けて、今私はミイナのところへと向かっている。

なんで、私たちが初めてあつた人を助けるかつて？

それは昔にこんな話があつたから。

5年前

当時のイギリスは戦争中だった。

イギリスは人間に特殊能力を入れ込み相手の兵士を殺すために英国系日本人を集めて特殊能力を入れたの。

もちろんそれに反対する親は大勢いた。

でも国の命令には誰もが逆らえなかった。

そんな中、まだマリが死んでいなかった頃私たちは普通に暮らしていた。

学校は戦争が近くなるとほとんどが訓練で違う施設へと入れられていた。

「ザックス、あんたまた訓練サボっていたらしいわね？」  
と当時の私は言う。

「え？ば・・・ばれた？」  
と当時のザックスも言う。

「あたりまえでしょ！あなたが居なかつたら全然訓練の空気違うんだから！」

「そ・・・そか、教官怒ってた？」

「相当怒ってるわよ！」

と私は言う。

「やべえ早く逃げないと・・・」  
とザックスは言う。

「ちょっと待ちなさいよ！！！」

と私は追いかけていく。

その時だった。

ザックスの前にマリが現れた。

「ちょっと、ザックス！教官が呼んでるよ！！！」

とマリは言う。

「（また、こいつか・・・）」  
と私は心の中で思う。

最近マリがザックスに積極的だなーっていうのは正直思っていた。

「げ、マリまで来たか・・・ていうか、俺が出頭する訳ねえだろ？　なんで教官のところへ行かないといけねえんだよ？」  
とザックスはマリに行った。

「そうじゃなくて！！教官が別の用事で呼んでるの！！」  
とマリは言う。

「俺はそんなのに！！騙され・・・うわああああ」

とザックスが言った途端マリはザックスを止めるために攻撃をした。

「キリヤ！！あなたも手伝ってくれる？教官が人数多い方がいいって言うってたの。」

と私は言われ、正直マリとザックスが2人きりになるのも嫌だったから私も着いていくことにした

「おう・・・いいわよ・・・何か知らないけど困っているんなら手伝うわ・・・」

・・・

教官室にて

「お、来たかザックス。」  
と教官は言う。

「あの・・・今日は・・・」  
とザックスは言おうとしたが

「もちろんしつかり罰は受けてもらうぞ。という訳で早速、応接室に入ってほしいんだ」

と教官は慌てながら部屋へと連れて行く。

そこに居たのは幼い少女だった。

「いいか、この娘どうやら道に迷ってこの前で一人でいたんだ。家を聞いたらこの街らしいから連れて行ってやってくれ。あと、マリとキリヤ。こいつだけじゃ心配だから、お前らも言ってくれるか？」

と言われ私たちはもちろん「うん」と言った。

・・・

「って言ってもよ・・・街って20kmも離れているじゃんか・・・」  
とザックスは歩きながら言う。

「しょうがないでしょ！大体あなたの罰なんだから・・・」  
と私は言う。

「でもしかし、この娘もよくここまで歩いてきたもんだね。」  
とマリは言った。

「おーい、お前ここまで歩いてきたんか？」  
とザックスは少女に話しかけるが何も言ってくれない。

「おーい、聞いてるか？」

とザックスはもう一度聞くがしかし答えない。

「っち、なんだよこいつ。人形のように喋らないじゃないか。」  
とザックスは言う。

「きつとなんかショックなんじゃない？親と離れたとかで  
とマリは言う。

俺たちは森などを通って近道しながら歩いていた。

と突然だった。

急にその少女は止まって

「あ・・・危ない・・・」

とつぶやいた瞬間

四方八方から銃声が聞こえた。

トトトトトトトト

ザックスはすぐに闇術で私たちを守ってくれた。

「何するのよー！」

と私は叫んだ。

その時、煙玉と多少の麻酔で眠らされた。

．．．  
．．．

「うう．．．ここはどこ？」

と目が覚めたら歩いてきた道の真ん中に倒れていた。

「ザックスたちはどこ!？」  
とすぐに思った。

しかし、そこには誰も居なかった．．．

辺りはもう暗かった。

「まさか、術者狩りに捕まったとかないわよね．．．」

と私は歩いているとさっきの少女が口にガムテープを貼られて車に乗せられる瞬間を見た。

私は当時そんなに力はなかったけど、あの娘のためならと思い急いで車のところへと向かった。

そして剣で車の窓ガラスを割った。

「なんだ、このガキは？」



と車に乗っていた人は言う。

「その娘を離さないよ!!」  
と私は言う。

「いい口聞いてやんな・・・ははは・・・それならここで死んでもらおうか!」

と相手の男は片手に炎を出しながら私に襲ってきた。

私は剣でどうにか止めることが出来た。

「ふっ・・・剣術か・・・」

と相手の男はいい

「これでどうだ!!」

と攻撃をしてくる・・・

「うわぁ・・・」

と私は飛ばされる。

「ほらよ、お嬢さん、これでも喰らえ!!」

と私は顔面に炎をあてられた。

体が動かなかった・・・

「どうだね？私たちの邪魔をしたらこんな風になるんだよ・・・最

後だ　　ここで眠るんだな」

といい相手は最大出力の炎を出して私に攻撃をしてきた。

・・・

でも私は生きていた。あの人がいたから。

「おいおい、何してんだよ。」

と相手の男に言ってるのはザックスだった。

「ほお、ボーイフレンドが助けに来たとかいうやつか・・・」  
と男は言った。

「ボーイフレンドだろうがなんだろうがしらねえがよ、困っている人を助けるのは俺の義務でな。」  
とザックスは言う。

「困らせているやつはここで始末しねえといけねえんだよな。」  
とザックスは睨みながら言った。

なんといつてもザックスは当時からランキング3だったから本気でかかると思いが手を出せなかった。

そして、ザックスは攻撃を開始していった。

「お前、なんでそこまでして、他人を守るんだ？」  
と相手の男は言う。

「決まってるだろ・・・他人だろうがなんだろうが無駄にいい命なんてどこにもねえ。」

そして奪っていい命なんてどこにもねえんだよ。

そんなのに他人、友人なんて関係ねえ。

俺は命を奪ったり捨てたりするやつが一番大っ嫌いだな！」

とザックスは本気の目でいう。

「そうか・・・でもお前はこの娘の本当の力を知らない。だから先に処理をする必要があるんだ！」

と相手の男は言う。

「そんなの知るか!!」

とザックスはいい、相手を思いつきり殴っていた。

でも、その男の言っていることは本当だった。

そして、少女はいきなり立ち上がりザックスをずっと見ていた。

「おう、お前大丈夫か？けがは・・・うっ・・・」

とザックスは言いかけ倒れてしまった!!

その時マリもちょうど駆けつけ私たちはザックスを必死に起こした  
!!

その少女は光に消えて行ったんだ。

・  
・  
・  
・

後からザックスはどうか目を覚ましたが後からいろんな結果が分かった。

あの少女は運命変換機と呼ばれ彼女と目を合わせたものは大きな不幸なことが起きると言われているらしい。

きっとそれはマリの死だろう。と私は思っていた。

でも私たちは言わなかった。ザックスに不幸なことが起きるって。

言わなかったのが間違いだったのかな・・・

・  
・  
・  
・  
・

と私は思いながら走っていた。

すると急に体が止まった。

「きみの気持ちはそういうことなんだね。」  
と突然男に声を掛けられ私は倒れこんだ。

- e n d -

## 19話 戦う理由（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったですら、  
評価・感想・お気に入りを書いてお願ひします。

## 20話 私の気持ち（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

とあるシリーズとこのダークマジシャンをコラボさせた小説もアップしました。<http://ncode.syosetu.com/n2809x/>

こちらもどうぞー！！

## 20話 私の気持ち

20話

「君の気持ちはそういうことなんだね。」

といわれキリヤは倒れこんでしまった。

「っち、なかなか時間が掛かるな・・・」

とザックスはルメリとテイトと戦いながら思う。

ルメリとテイトは無言でザックスに立ち向かっていく。

「悪いが、時間がないんだ。すまない。」

と小声でザックスはいいながらとどめを刺そうとした。

「っは。」

とルメリとテイトは目を覚ましたようだった。

俺はすぐに攻撃をやめた。

「わ・・・私たち何をしていたんですか？」

とルメリは言う。

「覚えていないのか？」

とザックスは聞くがテイトも

「覚えていません」

という。

「わかった事情は後で説明をする。今は急ぐんだ！」  
とザックスは言いながら2人を連れて行く。

そして、俺たちは走って向こう側へと走っていった。

しかし、そこへはすぐに着くことは出来なかった。

走っているとキリヤの姿がこっちからみえた。

「おおう キリヤー！！ ミイナは・・・」

といった瞬間キリヤは攻撃をしてきた。

「おい、何・・・」

とザックスが言おうとしたがキリヤは攻撃をやめなかった。

「そんな・・・キリヤさんが・・・」

とルメリは言う。

「違う、こいつは何者かに呪われているんだ」

とザックスは言ったところ

「そうですね、。私は特別な技を使いましたよ。彼女の気持ちをコントロールしているのですよ。」

と男は言う。その男の後ろには眠っているミイナの姿もあった。

「これは、あくまでも本当の彼女の気持ちなのです、申し送れませんが、私はウォーラーと申します。基本は人の気持ちを操って攻撃をしていくのです。今回あなたたちはその娘を助けようとしているようですが、私たちの作戦を邪魔してもらうことは出来ませんの



であなたが殺し合いをして、この作戦から消えてもらいたかったのですが、私がおもしろい気持ちを持った彼女を見つけたのでこの人を武器としあなたたちを殺そうと思います」

その話し方は丁寧だったがとてもむかつく言葉だった。

ルメリとテイトは相手のトラップで動けなくなっていた。

「さてと、あなたは彼女を殺すか、殺されるか どちらでしょうか」といった瞬間にキリヤはザックスを攻撃してきた。

「うち……」

「何年ぶりか こんな風に戦うのは。」

とザックスはいい、

「いいじゃねえか 本気でくる気持ちならよお」

と俺は言ってしまった。

「引くんなら今のうちだぞ！」

と言い俺は本気で立ち向かった。

「ちょっと！ザックスさん！いくらなんでも……」  
とルメリは言う。

「な……なんで なんであなたはそんなに関係ない人を助けたいの？ ねえ？どうして？」

とキリヤは戦いの中で大声で叫んだ。

「あ、何聞ってるの私・・・でもこれって本当の気持ち・・・」

「そんなの、決まってるじゃねえか他人だろうがなんだろうが無駄にしていい命なんてどこにもねえ。」

そして奪っていい命なんてどこにもねえんだよ。

そんなのに他人、友人なんて関係ねえ。

だから俺は助けに行くんだ。すこしでも力になれるようにな

と俺は笑顔で言った。

そのあとキリヤの動きが遅くなった。

「（あの時と同じことを・・・）」  
とキリヤは思っていた。

「最後のとどめだ・・・」  
と俺はいい、キリヤの影を踏んで動けなくした。

「（ちょっと・・・ザックス本気じゃない・・・？）」

「（私、これでよかったんだ・・・やっぱりザックスは変わらないままだね）」

「ダークインパクト！！」

と言い、キリヤに攻撃が当たりそうだった。

・・・

・・・

俺はとてもギリギリで攻撃を外した。

「目を覚ましたか。」

と俺はキリヤに聞く。

「え？・・・」

とキリヤは疑問を抱きながら言った。

「よし、キリヤの本当の気持ちも出たところで、ラストはお前をつぶさねえとなあ。」

と俺は言う。

「なるほど。この娘の本当の本当の気持ちを暴き出し私の呪いを取り消そうと・・・」

とウォーラーは言う。

「いや、ちげえんだな。悪いがお前の呪いを利用させてもらうんだよ。テメエの呪った技は本当の気持ちを攻撃の力に変換して倍の力にし戦うという力じえねえのか？」

じゃあよ、今のこいつの気持ちはなんだと思うんだあ？

そうだよ、真っ先にミイナを助けることだよお。」

と俺は言う。

「な．．．なに??」  
とウォーラーは驚く。

「私の．．．私の攻撃を見てなさいよ．．．ブレイカーソード！」

とキリヤはウォーラーに普通より倍の攻撃力で攻撃をしていく。

．．．

．．．

そしてザックスたちはウォーラーとの戦いに勝った。

「やりましたね、キリヤさん!!」

とみんなは言う。

「よくやったな。キリヤ。」

と俺も言う

「（私が倒したのかな．．．）」

「ええ。。。よく覚えてないけど．．．」

とキリヤは言う。

「よし、ミイナのところへいくぞ」

と俺はいい4人はミイナのところへ向かった。

「ミイナ!!」  
とみんなは叫ぶ

「大丈夫です。息はまだあるみたいで、少し薬を使って眠らされて  
いるようです。」

とルメリは言う。

「ちょっとあなた達。その娘を連れて行くつもりかしら?」

とある女が話しかけてきた

- e n d -

## 20話 私の気持ち（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、  
評価・感想・お気に入りを書いてほしいです。

## 21話 思い出(前書き)

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを書いてお願いします。

もうすぐ最終回でしー!!。

最終回が来ても2期やります。

ちよこつと話すと2期はだいぶガラツと話が変わりますんで。

最終回までggaggdとやっています。

## 21話 思い出

「私ね、そいつの姉なんだ」  
といい、ある女は出てきた。

「何だ？」

と俺は答える

「さあてと、しばらく苦しんでもらおうかな・・・」

と言うとそいつは俺たちを眠らせた

・・・

4人は目が覚めた。

そこは、俺とキリヤが通っていた学校に4人はなぜかいた。

「どづいうことだ・・・」  
と俺は思う。

「これはきつとあの女によって幻覚を見せられてるのではないでしようか・・・」  
とテイトは言う。

それに、ミイナはそこにはいなかった。

「いや、幻覚じゃない。俺があそこにいる・・・」



「え、どういうこと・・・私まで・・・」  
とキリヤは思う。

あれは小6ぐらいの俺だった。

なんとなく俺は思い出した。そして俺たちは草の中に隠れて小6の俺を見ていた。

どうやら休み時間みたいだ。まだマリはいない。この世界には俺が2人いる。

「ザックス！ちよつと職員室まできてくれ。」  
と言われあ那时的俺は職員室へと向かっていた。

俺たちはこっそりと職員室に向かっていた。

「ザックスさん覚えがるのですか？」  
とルメリは聞く。

「ああ、たぶんあれだ。」

職員室の中

「どうやら、お前のお母さんが倒れたらしい。すぐに病院へ送るから帰り支度するんだ。」

ルメリとテイトは初めてのことがあったから驚いたがキリヤはそのことを思い出していた。

と、すると4人は勝手に体が転送されるように消えていった。

飛ばされた先は病院の中だった。

すると、ザックスは頭を抱えながらうずくまってしまった。

「ザックス？」

と4人は声をかけるが

「駄目だ。もう思い出したくないんだ。これだけは思い出したくないんだ。」

とザックスは言う。

「そうよね。私も同じなもの。」  
とキリヤも言う。

まだルメリとテイトは理由がわからなかった。

「あ、向こう側から小さいザックスさんが来てます 隠れましょう。」

といい、4人は見つからないように隠れる。

そして小さいザックスは病室へと入っていったがすぐに泣き声が聞こえていた。

ザックスは目と耳をふさぎうずくまっていた。

そして、5分ぐらいするとザックスは医者と一緒に出てきたところちょうどキリヤもやってきた。

「(え、私? あ、そうだった あの時すぐに病院へと向かったん

だ。」  
とキリヤは思う。

二人は何かを話していたが聞こえてはいなかった。

そして4人は待合室のいすに座っていた。

キリヤはザックスの代わりにすべてをテイトとルメリに話した。

俺の母さんは術者狩りによって殺されたらしい。それも、俺がこの家にいることを知って探しに来たらしい。術者でもない人までを殺していた。

なぜ術者狩りが現れたかと言うとイギリスは俺たちの体に特殊能力を組み込ませたが戦争で使用する話はひとまずなくなったから国は俺たちを必要としなくなった。だから術者狩りはこのチャンスを活用して自分たちの体に特殊能力を組み込ませようとして術者を誘拐していった。

しかし、俺の母さんが死んだすぐの後イギリスは戦争を起こすとい俺たちを必要としたので術者狩りを取り締まることにした。

「そんなことがあったんだ……」  
とテイトとルメリは思う。

するとテイトとルメリの体が消えはじめていた。

「あれ……これは……」  
とキリヤは言う。

「どうなるんですか?? 私達??」

とルメリは言う。

「多分・大丈夫だと思うわ。 こっちはこっちに任せて・・・」

とキリヤは言う。

そして2人は消えて行った。

「私の苦しみか・・・」  
とキリヤは考えていた。

- e n d -

## 21話 思い出(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、  
評価・感想・お気に入りを書いてほしいです。

## 22話 雨（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを入力を宜しくお願いします。

前回の話を少し書き換えたのでこの話を見る際は前回のをもう一度ざらっと見て頂くといいかもしれません。

## 22話 雨

病院に残されたザックスとキリヤ。

ザックスはキリヤとあの時のことを病院で思い出していた

「確か、キリヤが向かいに来て一緒に家へ戻ったんじゃないか。」「  
」

「そうね、そんな気がする。」「

「そして、どうしたっけ」

「もう忘れたわ」

「なんか俺 引きこもってたっけ？」

「そんな気がするわ。」「

キリヤも俺の母さんにたくさん世話をしてもらっていた。ちょうど家が俺の隣だったからな。

だからキリヤもそのときはとても悲しんでいた。

「それより、なんで私たちはここにいるんだろう。 それにどうやったらここから出れるの？」「

とキリヤはぼそりと言っ。

「きつと、これが俺の苦しみなんじゃないのか・・・ そしてお前は俺が苦しむことが苦しみじゃないのか？」

とザックスは言う。

病院の外は雨だった。

「どづいづことよ。」

と私は思わず聞いてしまう。

「なあ、どうするか、ここにいてもしょうがない。」

「（ちょっと話そらさないでよ！）」

とキリヤは心の中で思う。

「俺、病室に入ってきていいか？」

とザックスは言う。

「うん。。。でもいいの？あの時怖かったとか言ってたけど」

「もう一度顔だけでも見れるんなら俺はもう一度見ておきたい。」  
「といい俺は病室へと向かった。」

・・・

5分ぐらいすると病室が騒がしくなったのに気づいた。

そして、キリヤはびょうしつへとむかった。



そこにはザックスが医者たちに動きを止められていた。

・・・

ザックスは少し落ち着き病院の待合室で待っていた。

「ねえザックス、何しようとしたのよ」

とキリヤは聞く。

「俺はあのおときより力が強くなったはずだ、だから死んだ人でも行き返せるかなーって思って」

とザックスは死んだ顔のような感じで言った。

「（これは重症だわ・・・）」

「ねえ、ザックス 何かわかるかもしれないからあの時の家に行こうよ。」

「・・・」

「（駄目かな・・・）」

と思ったがキリヤは俺の手を引っ張って病院を飛び出した。

「いつけない。傘ないじゃん。」  
と思うキリヤ

病院から家まではそこまで遠くなかった。もう忘れかけていたが

だから必死に雨の中を走っていった。

俺は何かが苦しめるような感じだったから何も言うことすら出来なかった。

・・・

家に着いた。

家にはキリヤが思い出したとおりに小さい頃のザックスとキリヤが居た。

キリヤは俺の手を引き必死に見つからないよう隠れていた。

すると、ザックスは急にキリヤの手を払い

「俺、どうすればいいんだろう・・・なあもっここで止めないか。俺たちは戻れないのじゃないのか」

と言った瞬間キリヤはザックスの頬を叩いた。

「あんた、言ったよね、『誰の命だろうが守る』って・・・あんた、それでそんな台詞いえるの？これが本当の目的じゃないでしょ？あんたにはまだやることがあるじゃない！」

キリヤの声が大きかったのですごしばれそうになったが家の中での時の俺たちに動きがあったからそっちに注目をした。

どうやらあまりにも落ち込んでいるザックスに対してキリヤはこういった。

「私・・・ザックスが一番つらそうにしているときが一番辛いんだ。

だからもう、悲しむのはやめようよ……」

とキリヤは言っていた。

キリヤは少し恥ずかしそうにしていたが、ザックスが言っていた『俺が苦しいときがお前の苦しいときじゃないのか？』の意味を思い出した。

「（そっか、あの時言ったのか……）」

俺はずっと地面に座って家の中の話聞いていた。

その頃のテイトとルメリだった。

テイトとルメリは目を覚ましたら現実の世界へと戻っていた。

「うっ……ここは……」

とルメリは言う。

「どうやら戻れたみたいで……」  
とテイトは言うが

「あ！ザックスさん達は！！」  
とルメリは言う。

「どうやらまだ、戻ってないみたいですね。」

「とりあえず、携帯は繋がるかな……」

とルメリは携帯でキリヤの携帯に電話をする。

すると・・・

「もしもし・・・」

とキリヤにつながった。

「あ、！キリヤさん よかった電話は繋がるんだ！」

「あれ、ルメリ？なんでつながるのかしら」

「よくわからないですけど私たちはどうやら現実の世界に着いたそうです。」

「ああそうなの・・・」

「私たちもこっちでキリヤさん達が帰れるようにするので」

「うん、わかったわ。」

とするとルメリは小声で話し始めた

「ところでザックスさんは？」

「大変だったわよ。 だいぶ精神的に来てるみたい。」

「そうですね。わかりました。」

「じゃあ よろしくね。」

といい電話を切った。

そしてキリヤはザックスに話しかけようとしたときザックスは何かを見ていた。

「あ……あれは……」

キリヤもその時から少しずつあの時の記憶を取り戻しつつあった。

- e n d -

## 22話 雨（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、  
評価・感想・お気に入りを書いてくださいますようお願いいたします。

## 23話 テイクオーバー（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

## 23話 テイクオーバー

- 現実世界

「とりあえず、戻ってこれたもののザックスさん達をどうやって取り戻すかを考えないと・・・」  
とルメリは言う。

「まず、ミイナさんを見つけられるほうがいいのでは？ きつとあの女もミイナさんを狙っているに違いないですよ。僕たちを眠らせるぐらいなんだから」  
とテイトも言う。

「でも、なんで私達だけ戻れたんでしょうかね？」

「きつとあの時に何か2人の共通点があったのでは？」

「じゃあ私たちには共通点がなかったっていうこと？」

「だと思いますが・・・お互いが苦しむことが・・・」

と2人はミイナとあの女を探しながら歩いていた。

すると

「あ、あれは・・・」

とテイトは言った



「どうしたの？あつ・・・あれミイナさんじゃない？」

と二人は急いで走って行ったがあと少しというところで見えない壁でふさがれていた。

2人は壁に電気が通っていたから麻痺していた。

「うっ・・・」

「まつさかぁ こんな原始的な方法に引つかかるなんて・・・おかしな人たちね〜」  
とあの時の女が現れた。

「あなたわ・・・」

「なんで、あなた達を連れ戻したかわかるかしら？ それはね 私の相手をしてもらうためよ・・・」

「いいでしょう・・・僕たちが・・・相手をしましょう。」

とテイトは言う。

「ふふうん おもしろいわね 私のスピードに追い付くかしら・・・」

とその女は瞬間移動でテイトの後ろへ回った。

「じゅっちゅー」

とその女はテイトを剣の持つところで殴る。

「ぐはっ。。。」

「（剣術師なのかしら・・・）」

とその後には女はルメリのところへと向かう

「あなたも殺される運命になるんだわ」

と女は言う。

しかし

「剣術なら私が相手をしましょう。あなたの攻撃は全て見えてますから。」

とルメリは言う

「ほおう 剣術ね。ならばどっちが先に死ぬかを競い合いますよ。」

と言いつつ女はルメリに向かっていった。

2人は剣を使い攻撃をしていった。

・・・

―ザックスたちの世界

「ちょっと・・・ザックス・・・どこ行くの？」

とキリヤはどこかへ向かうザックスに声を掛ける。

「あ・・・あいつは・・・」  
とザックスは言う。

そして、ザックスは今にも飛び掛かろうとしていた。

しかし、同時に家から小さいザックスが飛び掛かって行った

「おい、てめえーこのやるー俺のかあさんを・・・」

と小さいザックスは怒鳴りこみ黒い服を着た男に襲いかかる。

キリヤはザックスを引き返した。

「（そうだ・・・思い出したわ。あの時ザックスは黒い男を見つけた後すぐに飛び掛かって・・・）」

すると次に小さいキリヤも出てきた。

「ちょー！！ちょっと！ザックス！！」

キリヤが横を見た瞬間ザックスは居なかった。

そして黒い服の男を見るとザックスが歩いて向かっていた。

「おい、ガキ てめえ離れとけ。こいつは俺が殺す。・・・」

とザックスは小さいザックスに言う。

「お前こそ誰だよ！いきなり出てきて」

とするとザックスから今までも見なかったことのない闇の力が出ている。

「（テイクオーバー？）」

とキリヤはふと思い 小さいザックスと小さいキリヤを家の中に入れた。

「ちよつと！？お前誰だよ？」

と小さいザックスはキリヤに聞いてくる。

「ちよつとおとなしくしときなさい。」

とキリヤは言う。

それを見て小さいキリヤは何か不自然のような目でキリヤを見ていた。

「おい、あいつは俺の母さんを殺したんだ、俺があいつを殺すんだ」  
「！」

と小さいザックスは言う。

キリヤは窓から外を見ていた。

「（もし、あれがテイクオーバーならザックスの身が・・・）」

外では

「おいおい、誰だよ。お前 いきなり俺にキレてくるなんて・・・  
いったい俺のなんだっていうんだね？」

「勘違いも・・・よして・・・もらいたいなあ・・・俺の苦しみを  
作り上げた人よお！！！！！！！！」

と一瞬とザックスは暴走し始めた。

黒い光が家の窓から入ってきた。

・・・

光が収まったところ ザックスは黒い光で包まれ本当の姿が見えな  
かった。

「ちょっと！何が起きてるんだよお！」  
と小さいザックスは言う。

そしてザックスは黒い服の男の攻撃をよけながら攻撃していく。

「これが未来のザックス・アンドレスか・・・ ふふっん おもしろ  
い・・・」

と黒い服の男は言う。

そのころルメリと女は戦っていた。

「なかなかやるじゃない小娘」と女は言う。

「何、弱気になってるのですか？」とルメリも言う。

しかしお互い顔面から血を流していた。

「ならば、私の本気を見せてあげましょうか。」

といい女はルメリの動きを止める。

「はっ！！」

とルメリは驚く。

「そして、ヒュッと・・・」

と女は言う。と女は大きな岩にルメリの身を張り付けた

「本当はこんなことしたくないんだけど・・・なんていうのか・・・  
・ 死んでもらう訳ね。」

と女は言う。

「（そんな・・・私・・・）」

とルメリは思う。

「さて後は剣次第ね。この剣があなたの心臓を刺すかわすか……」

と女は言う。

「（や……やめて……）」  
とルメリは心の中で思う。

「これで終わり……」

と言うと女は走っていく。

……

「そんな卑怯な手でこの娘を殺してもらいたくはないね。」

と言ったのはテイトだった。

「ほお、気絶したと思ったらまだ生きていたのか。」

そう、テイトは女の攻撃を手で止めていた。

「そのぐらいの剣ならこの手でも止めれるね」

とテイトは言う。

「あなたと同じやり方をしよう。」  
とテイトは言う。と電波術で女を遠くの岩まで飛ばした。

「ぐはっ……」

そして女のところにテイトがやってくる。

「最後に2つ質問をする。」

とテイトは言う。

「1つ ミイナさんになんの危害を加えた？」

2つ ザックスさん達をどうやったらこの世界へ連れ戻せるか・  
・？

答えなければここで命を落とすだろう。」

とテイトは言う。

「そうね……どうせここで死ぬのなら本当のことを言いましょう。」

ミイナ・アイルからは彼女の特殊能力の3分の1の力を奪ったわ。

この力があるだけで私たちはこの国を滅ぼせる可能性もある。

そして向こうの世界から連れ戻すには私の力ではできない。

彼ら自身のつらい気持ちを克服し、笑顔になれることだわ。」



というとな女は目をつぶった。

するといきなり女は爆発した・

「そんな……」

とテイトは驚く。

するとルメリはテイトのところへと向かう。

「なんですかこの爆発は……」

とすると

「爆発の勢いと一緒に逃げて行っただけでしょう。」

とテイトは言う。

2人はミイナを連れ安全な所へと行った。

テイトはルメリに女が言ったことを全て話した。

「どうやらほとんどミイナさんには異常はないみたいですね。」

とルメリは言う。

「それなら良かったです。それと……キリヤさんには連絡を？」

「ええ、しよつと思っただんですけどつながらが悪くて・・・」

「そっか・・・」

「あ・・・あの・・・」

とルメリは言う。

「なんですか？」

とテイトは言う。

「今日は・・・助けてくれて ありがとうございます。」

「ああ 気にしないでいいですよ。でもこんなことが出来るようになったのはザックスさんのおかげかな・・・」

とテイトはぼそつと言う。

「私もです。こんなに戦う勇気をもらえたのはザックスさんのおかげですよ。」

いつの間にか降っていた雨はとっくの昔に止んでいたみたいな空だった。

- e n d -

## 23話 テイクオーバー（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったですら、  
評価・感想・お気に入りを書いてお願ひします。

## 24話 手紙（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

今回長くかぎすぎた。多分途中から意味分からなくなってると思うけど勘弁して下さい（・・・）

## 24話 手紙

確かザックスの母さんが新で2年後のはずだった。

なんとザックスは研究によって特殊能力を自分の体内で開発されていたことが分かった。

その能力こそ「テイクオーバー」

テイクオーバーは自分の感情や気持ちなどが混乱したりすると持っている特殊能力から予測不可能と言われるほどの能力が出てくると言われる。それも無意識で。

テイクオーバーが出来るかと確認されたのはこの世界でも少ない。

それにザックスの場合は普通のテイクオーバーとは違い何倍もの威力があると言われている。

ちなみにマリが死んだ時もテイクオーバーが確認されていた。

あの時は最終的に大爆発を起こし相手の敵を殺したはず。

それほどの威力だった。

それがまた自分の目の前で。

「（私じゃ止めれない・・・）」

ザックスは相手にひたすら攻撃をしていた。

もう黒い服の男には意識が見えなかった。

キリヤは思い出していた。

ザックスが言った言葉『俺は人の命がなくなるのは嫌いだ』

キリヤはその言葉が今のザックスと矛盾していることに気付いた。

そして、キリヤはすぐに外へと出た。

「あ、危ないのじゃ!?!」

と小さいキリヤは言う。

「(わかってるそんなの、でも私にできること)」

しかし、ザックスは止めを刺そうとしていた。

「ザックス!」

とキリヤは叫ぶ

ザックスは最後のとどめを刺すところを止めた。

「あんだ、自分で言ってたわよね? 人の命が消えるのがいやだつて!」

あんだ、今人を殺そうとしているよね? どんな命でもなくなっ  
ていい命なんてないんだよね?

じゃああんだ今何してんの? ねえ? ザックス!」

というとテイクオーバーしたザックスは叫び始めた。

「わかってる、今のあんたが私の声が聞こえないことなんて

でも私は聞こえなくても届いてるって信じてる・・・

だから・・・」

というと小さいザックスが私に向かって走って押し倒した。

ド  
ン

今までに聞いたことないほどの爆発音だった。

「(まさか・・・)」

・・・

「大丈夫？ねえちゃん？」

と小さい頃のザックスは声を掛ける。

「あれ・・・どうしたの・・・」

とキリヤは言う。

「良かったあ。どうやら爆発の影響で気絶してたみたいよ。」  
と小さい頃のキリヤが言う。

「そうなんだ・・・ あっ ザックスは!？」  
とキリヤは思わず言う。

「ああ大きい方の俺か・・・ そいつなら向こうで・・・」

と小さい頃のザックスは言う。

「気づいちゃったの？」

とキリヤは聞く。

「まあ、あんな技使えるの俺だけだからな。 それより行かなくていいのか？」

と小さい頃のザックスは言う。

そしてキリヤは走ってザックスのところへ行った。

「ひどいけど・・・」

ザックスは酷い怪我を負っていった。

そしてキリヤはザックスを抱え家へ戻った。

ザックスはしばらく目を覚まさなかった。

その間にキリヤは小さい頃の2人にすべてを説明した。

その説明をすると小さい頃のザックスは何か手がかりがないかと外へ探しに行った。



今までそんな記憶はなかったがキリヤは記憶が書き換えられている  
感じだった。

すると小さい頃のキリヤはキリヤにある手紙を渡した。

「ねえ大きい方の私。これ、ザックスの家のテーブルの上に置いて  
あった手紙なんだけど大きい方のザックスに渡しといて。多分そ  
ちの方がいいと思うから・・・」

と小さい頃のキリヤはいい

「わかったわ。必ず渡しておくよ。」

とキリヤは言う。と小さい頃のキリヤは家へと帰って行った

キリヤはその手紙をこっそりと呼んでいた。

・・・

3時間後ぐらいザックスは目を覚ました。

ザックスが戦った相手は爆発音を聞いてやってきた警察が署まで送  
って行ったがその時警察は帰って行った。

「うう・・・ここは・・・」

とザックスは言う。

「あんたの小さい頃の家よ。」

とキリヤは少し離れたところからザックスに言う。

「俺はあいつを……」

とザックスは言う。

「私の気持ち……届いてくれたのかな？ 相手の息はあつたらしいよ。それと手当てあげたの私だからね!!」

とキリヤは言うが

「は？なんのことだ？」

とザックスは言う。

「何よ!! もういいし。 それよりそこにおいてある手紙を呼んで見てよ。きつとあんたの気持ちもすつきりするんじゃない？」

とキリヤは言う。

「なんだよ、その言い方 まさか人の手紙でも見たんか？」

とザックスは言いながら手紙を見る。

するとザックスは涙を流し始めていた。

『ザックスへ。』

今日はちよつと隣の町まで買い物に行ってくるから少しの間留守番しておいてね。

夜までには帰ってくるつもりだから。もちろん覚えてるわよ。今日

が私の誕生日だって。

朝は人の話を聞かないで怒りながら学校へ行ったけどそれについてはまた後日説教をするわ。

誕生日会楽しみにしているわ。だけど、プレゼントはそんなに高価なものはいらないよ。

だって、私は最高のプレゼントなザックスを……」

お母さんはこの手紙を書いている途中に殺されたんだとザックスは思った。

少しにじんでいる血が手紙に着いていた。

「ねえ、ザックス？もうこれで、いいわよね？」

とキリヤは聞く。

「ああ」

とザックスが答えたとき2人はあの時のように体が光で消えかけていた。

「これって……」

「どうやら戻れるみたいだなあ。」

「そっか……」

とキリヤは言う。

「（ヒントをくれてありがとう。小さい頃の私。）」

とキリヤは思っていた。

・  
・  
・

2人が目を覚ました時、見えていたものは白い天井だった。

「戻れたのかしら・・・」

とキリヤはつぶやいたとき。

「キリヤさん！！目を覚ましてよかったです！！」

とルメリは言う。

ルメリが言うにはキリヤ達は道の途中で倒れていてそれを偶然ルメリとテイトが見つつけあまりにもひどい怪我をしていたので病院へ運んだという事だった。

「ミイナは大丈夫なの？」

とキリヤはルメリに聞く。

「ええ、ミイナさんも特殊治療を受けてすぐに退院することが出来るそうです。」

とルメリは答える。

「キリヤさん、一つ聞いていいですか？」

とテイトは言う。

「ええいいわよ。」

とキリヤは言う。

「ザックス兄さんの傷って・・・もしかしてテイクオーバーでも？」

「その通りよ」

「止めることは出来なかったのですか？」

「ごめん、あの時の力とは全然違っていたから・・・」

「そうですね・・・でも命に別状はない見たいので良かったです。それと緊急処置も丁寧に出来ていたから一命を取り戻せたと医者は言っていましたよ。」

「そっかぁ・・・」

と2人は話していた。

「テイクオーバーかぁ。」

と外である男が一人つぶやいていた。

・・・

・・・

4日後

2人は無事退院することができザックスは調子も取り戻していた。

「なんやかんや言っつてー最後の街はここだったー!! チェックもできたしー郵便局に入院代の請求書も送ることができたしー いよいよ最後の山へ向かうだけだー!!」

とザックスはテンションが高かった。

「あんたさあ、人がどれだけ苦労したと思っているのよ?」  
とキリヤは言う。

「ええっ?なんだそれ?」  
とザックスは言うときリヤはザックスに一発殴る。

「おいおい、けが人だぞ!こっちは!!」

と2人は喧嘩している。

「それより、もうここまでこれたなんて早かったですねー。」  
とルメリは言う。

「それでもなかったのじゃ?結構予定がオーバーしていますよ。」  
とテイトは言う。

すると後ろから走ってくる少女がいた。

「はあはあ・・・あのお!!」  
と走ってくるのはミイナだった。

「あれ、お前はミイナか？」  
とザックスは聞く。

「はあはあ・・・あのザックスさん、キリヤさん、ミイナさん、  
テイトさん 私と父さんを助けてくれてありがとうございます。」

とミイナは丁寧に言う。

「いやいや、俺は何もしてねえよ。 礼言つならこの2人に言っ  
てくれ。」

とザックスは言う。

「そして、これが父さんからのお礼の手紙です。」  
とザックスは手紙を受け取る。

「あと、ザックスさんお願いがあるんですけど・・・ 話は全部医  
者から聞きました。」

もしよかった恩返しというか・・・ この旅についていかせてくだ  
さい!」

とミイナは旅の用意をリュックにからっていた。

「そこまで用意してるならなんて・・・」

とキリヤは言う。

「いいんじゃないの? でもよ、これからが厳しいけどいいのか?」

とザックスは聞く。

「私の力でいいのなら手伝わせてください!!」

「よし、わかった5人で行こう!!」

と5人は最後の山へと向かっていた。

- e n d -



## 24話 手紙(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、  
評価・感想・お気に入りを書いてお願ひします。



## 25話 生命の山

25話

「ここが、願いを叶えてくれる仙人がいる山か・・・」

「いや、長かったですね・・・」

「ほんと、長かったね・・・でもこんなところに住んでるの?」

「この山・・・いやほとんど崖みたいですがここにもトラップがあるかもしれないですから慎重に行きましょう」

「私も頑張るよ!」

と5人は最後の場所

『生命の山』

を登り始めていた。

生命の山は標高2500mぐらいだがほとんどが崖みだいになっていて危ない山でもある。

「この山はどうやら昔から生命が誕生したと言われているから生命の山と言われているらしいです。」

それに山を登れたものは居るかと言われるとごくわずかの人数しか登れていないと書かれています。」

とテイトは言う。

「要するに、命がけで行けっことかぁ!！」

とザックスは言う。

「あなたね・・・命がけってそんなに大きな声で元気に言わないでよ!！ 本当に危なさそうな山だから。」

とキリヤも言う

「本当に気味悪いね・・・」

とミイナもいい

「私も嫌な予感がします・・・」  
とルメリも言う。

すると辺りはもっと暗くなり、次第に雨が降ってきた。

「雨降ってきたよ・・・」

とミイナは言う

雨は次第に強く降ってくる。

5人は山の洞窟に雨宿りしていた。

「おいおい、この雨やべえぞぁ・・・ 土砂崩れとか・・・」  
とザックスは言う。

すると、本当に歩いてきた道が土砂でいっぱいだった。

「うわぁ・・・本当に土砂崩れジャン・・・」

とキリヤは言う。

2時間ほどすると雨はやみ土砂も引いていた。

「うわぁーひどいことになってますね。」

とルメリは言う。

「とりあえず、登ってみるか・・・」

とザックスはいい5人は山を登っていく

昇っていく途中に雷が落ちたり熊が現れたり、猟師に間違えて狙われたりしながら5人は少し平らな休憩地点へと行った。

「はぁはぁ・・・さすがこんな山だ・・・誰も登れるはずがネエ・・・」

とザックスは言う。

「もう疲れたー・・・」

とミイナは言う。

すると山の上からある男が一人歩いて降りてきた。

「あ……あれは……」

とザックスは言う。

そしてキリヤも同じことを言う。

「なんとというか、久しぶりというか……こんなところで会えるなんてねえ。」

どうしたんだい？ ザックス・アンドレス君よ……」

と男は言う。

「（嘘、生きてたの!?!）」  
とキリヤは思う

「お前は……あの時の……」

とザックスは目を丸くして言う。

これもあの時の事だった

3年前。

このたびの目的はもちろんマリに会うためだ。

そのマリが殺された時だった。

俺たちはイギリスに兵器扱いとされ戦場へといた。

もちろん、兵器だから死んでも何も思ってくれない。金さえ出してくれなかった。

でも当時はそんなイギリスに逆らえることすらできなかった。

「今日は、ザックス・アンドレスをリーダーにしクレス・シータ、トード・サミルダーで1番部隊の方へ行く。そして・・・」

朝に大切な話があると俺たちは教官に集められていた。

「おいおい、ザックス、俺たちで1番部隊だつてよ・・・これはやべえぞ」

と話すのは一緒にいたクレス

「1番部隊だろうが何だろうが、俺は武器扱いされているのは嫌だな・・・」  
とザックスは言う。

「まあよ、3位と5位7位がこのグループに入るんだから大丈夫だ！...」  
とトードは言う。

発表が終わった後、ザックスのところにマリがやってきた。

「ねえ、ザックス。どうやら戦争に行く見たいわね。」  
マリは少し遠いところから話しかける。

「ああ」

「今回は危ないことにならないよね・・・」

「約束するよ。。。」

「もうザックスがけがするところは見たくないからね・・・」

「わかっているよ・・・」

「本当に？」

「本当だ・・・絶対に大丈夫」

そして俺たちは時間になると基地を出て戦場へと向かった。

その時見た光景はあまりにもひどかった。

3人VS10人だった。

「おいおい、待てよ・・・10人って・・・こっち3人だけ・・・」

とクレスは言う。

「っち・・・やるしかねえんじゃねえのかあ」

とザックスは言う。3人は戦いへ行く。

「これでも喰らえ!!」

「っちあたらないな・・・」

「ダークボール!!」



と3人は10人に戦う。

確か残り4人のところだった。

「ぐはっ……」

トードが相手にやられていた。

「トード……」

すると相手はトードに一発刺しトードは戦闘不能となった。

「トード……大丈夫か……おい……」

とザックスは言う。

「あいつは……強い……」

とトードは言う。

「お前、そんなこと聞いてネエ……お前のことだ……」  
とザックスは言う。

「おい！最後まで頑張るんだ……！すぐに救護が来る……！」  
とザックスは言う。

「いったい……誰なんだ　こんな強い力を使っているのは……」  
とクレスは言う。

すると

「俺のことかなあ？そいつをとどめ刺したのは俺だよー！！」

と余裕見たいな感じでいうのはマリを殺したあいつだっ

「クレス・・・お前はこいつ以外の相手を頼む。俺はこいつを敵にする。」

とザックスは言う。

「・・・ああ わかった。」

とクレスは言う。と戦いへ戻って行った。

「お前の力が何かわかんねえけどよお 俺の仲間を刺したことは許せネエなあ だから俺はお前の相手をする」

「君は戦争という意味を知らないみたいだね・・・ 戦争は人が死んでも関係ない。むしろ戦争は人が死んでまですることがあるからするんだよ。だから戦友の死をそこまで君は思わなくてもいい・・・」

「ふざけたこと言うんじゃないやねエ！！ あいつは俺の戦友じゃねエ！友達だ！！」

とというとザックスは攻撃を仕掛けていく。

しかし、ザックスは動きを止められた。

「なに！？」

「それなら、君も僕たちの仲間を殺しているという事じゃないのかな？」

と相手は言つとザックスをぼこぼこに殴っていく。

「っち……」

ザックスは無言で殴りかかりに行くがまたもや攻撃を止められる。

「君、学習能力がないのかな？同じことをするって分かってるでしょ？」

「うるせえ俺はお前をぶち殺す！！」

とザックスは何回も同じことを繰り返した。

「うっ。。。」

「もう動けないのかね？僕は何も攻撃をしていないんだけど……  
と相手は言つ。

「僕もこつこつのは好きじゃないからもう殺さしてもらつよ……  
この剣で……いい死に方かはしらないけどね……」

というと相手は動けないザックスを殺しに行く。

「（もう、終わりか……）」

グサツ……

「（生きてる・・・なんでだ・・・）」

目の前には倒れているマリがいた。

「!？」

「マリ!!なんでここにいるんだ!!」

「約束・・・したじゃん・・・もう・・・危ない目には・・・合  
わないうて・・・」

「だからって!!」

「あなたには・・・まだ死んでもらうてはいけないの・・・だ  
から・・・私は・・・」

「すぐに病院へ行くんだ!!」

「う・・・うん・・・ザックス・・・ありがとう・・・」

そしてザックスは

「おい、こつちも本気で行かさせてもらおうか・・・」

とザックスは小声でいう。

そしてザックスはテイクオーバーを起こした。

「うおおおおおおお」

・  
・  
・

そのあとザックスは病院へ運ばれていたがマリは死んでいた。

トードは処置が早かったので息は取り戻した。

そんな相手がここになぜいる・・・どうして・・・

「てめえ・・・」

とザックスは再び会った相手に言う。

- e n d -

## 25話 生命の山（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、  
評価・感想・お気に入りを書いてお願ひします。

## 26話 ロシアンルーレット（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

アイデアが思いつかない・・・

## 26話 ロシアンルーレット

「待ってくれ、俺は戦うつつもりはない。まだ君は勘違いしているみたいだからな。前にも言ったがあんたの娘は戦死したんだ。だから君は何も思わなくてもいい、そして君はあんな娘のために旅をしているんだろ？でも、あれはあくまでも戦死したんだ。君は勘違いしているんだ。」

と男は言う。

「お前・・・それが・・・お前の考えなのか・・・大切な人が死んでもそれでいいのかぁ・・・ てめえは知能の少なえ人間なのかよお？」

とザックスは男へ立ち向かうが相手の男によりザックスの動きは止められる。

そして相手の男はザックスを飛ばす。

「君こそ、本当に学習能力がないんだね。前も戦ったでしょ？なら、ほかの方法でも考え名よ。」

と、相手の男は言う。

「ちょっと・・・あんた・・・あんたの言ったことは私でも腹が立つたわ。」

とキリヤは言う。

「私もです。黙っていられません。」

「これでもくらいな!!--!」



とキリヤは攻撃していく。

しかし、相手は攻撃を止める。

「そんなばかな・・・うわああ」

とキリヤは飛ばされる。

「キリヤさん！！ 私もいきます！！ いけー」

とルメリも攻撃していくがやはり止められ飛ばされる。

続いてテイトも攻撃していくがやはり同じパターンである。

「なんていう強さなの・・・」

とキリヤは言う。

すると

「俺の仲間はまだ手を出すのか・・・」

とザックスがでてくる。

「攻撃を止めたただけなんだが・・・何か悪いか・・・」

と相手の男は言う。

「いいか・・・こいつらには手を出すな。こいつらは俺に手伝っ

てもらってるだけなんだ・・・殺すんなら俺を殺せ・・・」

とザックスは言う。

「なかなか強い意志なんだな。もう死ぬ準備は出来てるってこと

か・・・」

と相手の男は言う。

「ならば・・・こんなめんどくさいことも早く終わらせようかなっ

と・・・」

相手の男は最大出力でザックスに攻撃をしていく。

「そうか・・・お前は風を使っているんだ・・・最初はわからなかったが・・・」

とザックスは言う。

「風だろうがなんだろうが俺に勝てるのか……？」  
と相手の男は言う。

「こつちも本気でいかせてもらおうか……」  
とザックスは言う。

「俺のスピードに勝てますかね？」

と相手の男は素早くザックスの後ろに回った。

「ここから落ちて死ぬんだな……」

と相手の男は言う。とザックスを最大出力の風で崖から落とす

「うそでしょ……ザックス……」  
とキリヤは言う。

「これで終わったな……君たちもな……」  
と相手の男は言う。

「私たちの本気は……まだ見せてないんだから……」  
とルメリは言う。

そして3人はまた攻撃へ向かう。

「だから無駄っていつてんでしょ。君たちの攻撃じゃね。怪我ひ  
とつもしていないよー」

と相手の男は3人を岩に張り付けながら言う。

「まあね、ここで死んでもらうのは確かだけど僕もねー楽しみたい  
からひとつゲームをしようか……」

「なんでも受けるわ・・・だから離しなさいよ・・・」  
とキリヤは言う。

「それは無理かな・・・だってそうじゃないとね・・・さてと  
ロシアンルーレットでも始めましょうか・・・」

「ロシアンルーレット!?!」  
と3人は言う。

「(俺は生きているのか・・・)」  
とザックスは目を覚ます。

「ザックス!!大丈夫?」  
と声をかけたのはミイナだった。

「ああミイナか・・・つておい お前なんでここにいるんだ?それに  
何で俺は無傷なんだ?」  
とザックスは聞く。

「それはね・・・私の力なんだよ。 私は水術師でしょ。それで助け  
たんだよ。」  
とミイナは説明する。

「でもよ・・・なんでここに?」

「まあ少しだけ・・・私予知能力があつて・・・ こうなること  
がわかっていたんだよ・・・だからここに・・・」

「そっか・・・」

「それよりさ・・・たぶんだけど早くあがらないとみんなが・・・」  
とミイナは言う。

・  
・  
・

「ここに4つの銃が浮かんでいまーす。それぞれの銃には弾がひとつ入っている。」

ルールは簡単 この銃を一回ずつ撃っていく。その中で弾に当たれば死ぬ・・・ 運がよければ死なないんだが・・・ それはないと思ってくれ 全員死ぬまでやるつもりだからな・・・」

「そんな・・・私たちの死を遊ぶなんて・・・」  
とルメリは言う。

「じゃあはじめようか・・・ まず1発目だ。」

カチャ

カチャ

カチャ

「おう・・・ラッキージャンー！！ 最初はみんな生存確認 ってことかな・・・ うわぁおもしろー じゃあ2発目いこうか・・・」

「もうやめろー！！」

とテイトは叫ぶが

カチャ

カチャ

カチャ

「うひょー いいねいいね もうすぐ死が迫ってるって感じー」

「もういい加減にしてよー！！」

とキリヤは叫ぶ

「いつておくけど・・・君たちも風で押されてるんだから弾も倍の  
速さで君たちの体に食い込むからね・・・じゃあ3発目・・・  
そろそろ誰かが死を迎えるのかな・・・」

カチャ

カチャ

・・・

ドーン！！

「（いつたい誰が死んだの・・・）」  
と3人は思う

前は煙で曇っていた。

「3発目に弾が入っているのはテイトの銃だ。」  
といったのはザックスだった。

「これにてゲームは終了だ。これからは俺とお前のゲームを開始し  
よう。」

「（ザックス！？）」  
と3人は思う。

「ほうほう 生きてたんだね。そのゲーム参加させてもらおうか。」

- e n d -

## 27話 戦争（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。

次回から最終回です！！最終回は2回に分けますね！！

## 27話 戦争

「ゲームのルールは簡単だ。どっちが先に死ぬかな・・・」

とザックスは言う。

「望むところだ。」

と相手の男も言う。

「先に名乗っておくが、俺の名前はガルス・ナイルだ。殺された相手の名前ぐらい憶えておいた方がいいんじゃない？」

とガルスは言う。

「そうだな。でもよ、俺は覚えなくてもいいようにしてやんよー  
ー！！！」

とザックスは攻撃をする。

「だから、無駄って言うてるでしょ？俺に攻撃をしても君は死ぬだけ。そう、まるで鏡に映ってるみたいだね。」

とガルスはいいザックスは攻撃により飛ばされる。

「うち・・・まだまだいくぞ。」  
とザックスは言う。

「あの時と全く変わっていないみたいですね・・・少しは成長した

かと思ったけど。」

というとザックスは攻撃をしていくがやはり飛ばされる。

しかし、ザックスは攻撃を繰り返す。

「めんどくさい奴だな・・・お前は殺されたいのか？」

とガルスは言う。

しかし、ザックスは走るルートを変えさつきと違う位置へと向かう。

「なるほど、少し変えれば風に当たらないと考えたんですね。でもね、俺は四方八方から風が出ているから無駄なんですよ、無駄。」

とガルスは言う

「そんなの・・・やってみねえとわからねえだろ・・・」  
とザックスは言う。

「そうですかね、わかっていることを何回もやっているのを見るとただのバカにしか見えないんだけど・・・」

とガルスは言う。

「もう、あんなに傷ついていくのは見てられないよ！」  
とキリヤは言う。

「大丈夫だよ。キリヤ。ザックスはきつと大丈夫。あと、少し頼みがあるんだけど・・・」



とミイナはキリヤに話しかける。

．．．  
．．．

「そもそも、お前の戦う理由はなんだい？聞かせてもらおうか．．．

」

とガルサは言う。

「やはり、あれがお前の恋人が死んだからか？もうそろそろ理解してくれよ。あれは戦死なんだ。だからお前がそんなに落ち込む必要はない、それが戦争なんだ！！」

とガルサはいう。

「違う．．． あいつは．．．戦死なんかじゃねえ．．． 全部俺のせいなんだ．．．俺がお前にやられてよお動けなくなり しておめえは俺を殺そうとした。でもあいつはそれを代わりに受けたんだあ。  
だから戦死じゃねえ．．． それに 戦死だろうがなんだろうが．．．  
．．． 死んでしまってもいい命なんてどにもねえ．．．俺  
はもう．．．何も失いたくねえんだ。 だけど、奪った命を取り返すのはいいんじゃないか。お前はあいつの命を奪ったんだ。だから俺はお前と戦う必要がある．．．俺は．．．お前を殺す必要があるんだよおおおお」

とザックスはもう一度飛び掛かってくる。しかし、ザックスはまた飛ばされる。

「なるほどな。俺があいつの命を奪ったからお前は俺を殺す。悪いが俺はな何人もの人を戦争で殺したんだ！ だから一人ぐらいの命なんて知らない。むしろそんな多くの人のことを考えるなんてしてたら頭がいかれてしまうからな。俺はいますぐお前みたいな人間をこの世から消したい。だから俺はお前を殺す。実はお前もロシアンルーレットで殺そうかと思っただがお前の場合は一発急所に当たった方が面白そうだな。そこで命を落とすんだな。」

とガルスは風でソードを作り出した。

「ウインドソードっていうんだが風で体をばらばらにするんだ。骨もな。死んでしまえ！！」

とガルスは攻撃をしていく

・・・

「何、ソードが!?!」

とガルスは言う。

「残念ね。あんた。あんたもザックスと一緒に条件がそろわなかったらただのへぼっぴなんだね。」  
とキリヤは言う。

「てめえ何をした?」

とガルスは言う。

「簡単だよ！キリヤの術でこのある範囲の時空を変えて風を通らせないようにしたの。」  
とミイナは言う。

すると雲の間から太陽の光がガルスに当たっていた。

「おっと、影が出てしまったな。。。じゃあお前はもう動けないって事か」

とザックスは言いながらガルスの影を踏み動けないようにする。

「悪いが、お前が人を何人も殺したのは自慢にもなつてねえぞ。もちろんお前も知ってるだろうが。」

とザックスはいいガルスを殴る。

そしてガルスは飛ばされザックスはまたガルスのところへ行く。

「く・・・くるな!!」

とガルスは言う。

「とどめだ」

とザックスはいい攻撃をする。

・・・

「さっきの攻撃は俺の怒り。今の殴ったのはお前が迷惑をかけた人の分だ。」  
とザックスは言う。

「なぜ殺さないんだ？」

とガルスは言う。

「俺は知っている。お前が人を殺したくて殺したんじゃないやねえってこと。俺だつてそうだった。戦争で人を殺したくなかったでもよお殺さなきゃいけないかった。そのあとの俺は親の死を迎えるまで人を殺したつてどうでもいいと思つてた。でもよお 実際に自分の大事な人が居なくなつたら俺の考えは変わったんだ。だから俺はお前を殺さねえ。もう一度頑張ってもらいたいんだ。俺も同じだから。」

とザックスは言うとすぐにパトカーはやってきてガルスを乗せて行った。

「ザックス・・・俺はお前を一生忘れねえからな・・・」

と最後にガルスは言う。

「ああ 俺もだ」

とザックスは言う。

そして

「いやあザックス！！かつこよかったよ！！」

とミイナは言う。

「本当です。あそこまで相手を沈めたなんて！！」

とミイナは言う。

「いやいや、キリヤとミイナのおかげだぜ。　キリヤありがとな。」  
とザックスは言う

「何言ってるのよ！！私もミイナに言われないと気づかなかったんだからね・・・」  
とキリヤはテレながら言う。

「それにしてもミイナってすごい力ですね。」  
とテイトは言う。

「できるのはこれぐらいだけけど・・・」  
とミイナは言う。

「さてと、これで大丈夫だと思う・・・ラストだ・・・」  
とザックスはいい5人は山を登り最後の場所へと向かう。

- e n d -

28話 (最終回1) (前書き)

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったですら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

最終回でし!!! (´・`・´)

## 28話 (最終回1)

### 最終回

俺たちはマリを殺したガルスを山の頂上へ行く途中で倒し旅の最終チェックポイントへと向かった。

山の一番上に願いを叶えることができる仙人がいるらしい。

なんといつてもこの旅を成功させたものなどいない、ということだから。

仙人が本当にできるのかもわからない。

そんな不安の中俺たちはとうとう頂上へと着いた。

「ここか・・・」

とザックスたちは言う。

「随分と高いところだね。」

とキリヤは言う。

「これで旅も・・・」

とテイトは言う。

そこには鬍を多くはやしたおじいさんが居た。

おじいさんは小さな声で

『額を出せ』

と言われたので5人は額を出した。

『お前らは、全てのチェックポイントを回り、依頼を全て受けそして、全て解決し 己を信じ歩いてここまで来たことを認める。 どうぞお入りください』

と言われた。

「（本当に、触っただけでわかるんだ・・・）」  
とルメリは思う。

階段を上がっていくとまた違うおじいさんがいた。

「君たちだね。このたびを成功させたのは」  
と言われた

「あ、はい。 旅をしてきたのは俺たちだ。」  
とザックスは言う。

「ふむふむ、なるほど、その背が高い男の願いは死んだ恋人ともう一度会いたい、そしてほかの4人の願いはまた別々だが、わしは一気にすべての願いを叶えることができない、せめて一人なんだが 誰の願いにするかね？」  
と言われ5人は黙り込んだ。

「もちろん、ザックスのよ。 私たちはそれのためについてきたんだから。」  
とキリヤは言う。



「うん、僕もそう思う。」  
とテイトが言つと

「私も」

とルメリとミイナは言う。

「みんな・・・ありがとう・・・」

とザックスは緊張しながらお礼を言う。

「なあじいさん、本当に会えるんだな。」  
とザックスは聞く。

「ああ会えるだろう。ただし、わしは彼女の生活を変えることはできない、ただあなたが出来るのは彼女を見るだけだ。しかも、どんな形で見ることが出来るかもわからん。もしかしたら彼女はあなたを忘れていくかもしれない。もしかしたら、彼女はあなたを恨んでいるかもしれない。それでもいいならかなえてあげよう」

と言われた。

「ああ、それでも会いに行く。」  
とザックスは言った。

「よし、わかった。それとあなたは死の世界へ行くことになる。もし、死んだにも触るとあなたはここへ戻れなくなる。それでもいいんだな。」

という言葉に5人は驚いた。

「・・・」

「ああいいだろう。」

とザックスは言う。

「それでは儀式を行おう。悪いが4人は向こうの扉の奥で待つてもらえるか？」

「ええわかりました」

とテイトは言う。

「ちょっ・ちょっと待って！」

とミイナは言う。

「ザックス・・・必ず帰ってきてね。」

とミイナは涙を浮かべながら言った。

「ああわかった」

・・・

扉の奥

「ザックス帰ってきてくれるかな・・・」  
とミイナは言う。

「大丈夫よあいつもそこまでバカじゃないから」  
とキリヤは言う。

「でも、興奮して飛びついたりとか・・・」  
とルメリは言う。

「俺たちは信じることでしかできないよ・・・みんな」  
とテイトは言う。

・・・

「準備はいいかね？」  
と仙人は聞く。

「ああいいだろう。」  
とザックスは言う。

「よし、行くぞ。」

と言われた後俺は体が急に軽くなった。

そして目が覚めるとなぜか青空の下に居た。

「ここは死の世界か・・・」  
と俺はつぶやいた。

そして俺の隣には郵便局のバイクがあつて俺はなぜか郵便局の制服を着ていた。

俺は思い出した。仙人の言つてたことを。

「（ああ会えるだろう。ただし、わしは彼女の生活を変えることは

できない、ただあんたが出来るのは彼女を見るだけだ。しかも、どんな形で見ることが出来るかもわからん。もしかしたら彼女はあんたを忘れているかもしれない。もしかしたら、彼女はあんたを恨んでいるかもしれない。それでもいいならかなえてあげよう。」

「そうか、俺は死の世界の郵便局で働いているのか・・・」

とバイクの後ろを開けると手紙が1通入っていた。

そこの宛先には亡き恋人のマリの名前が書いてあった。

坂見原・・・その名前が書いてあっただけですぐにピンときた。

俺は急いでバイクに乗った。なぜか知らないが体がマリの家の地図がインプットされている感じみたいにバイクを運転していった。

道のりは長かった。

2時間弱だろうか・・・

50CCのバイクだったから途中ガソリンも入れなおした。金もポケットに入っていた。

そして・・・

「ここか・・・坂見原の家は・・・」

俺は緊張しながらも家のチャイムを押した。

ピンポン

「はい、あ、郵便ですね。今行きます。」

どうやらマリのお母さんなのかそんな声がした。

もちろんマリのお母さんなんて知らない。知ってるのはマリのお母さんはマリのミスで死んだということだけだ。

「あら、新人さん？ 今日郵便有難うね。マリ、郵便の前の人をいつも楽しみにしてたけど担当区域が変わったのならしょうがないわね。」

とお母さんはいい俺は適当に返事をした。

「あの・・・そのマリさんっていうのは娘さんですか？」  
と俺は聞いてしまった。

「ええそうよ、私はあの娘より先に死んだんだけど、ずっと娘のことを思っていたらある日急に現れて・・・ 私はそのあとからともこの生活が楽しみでね・・・」  
とお母さんは嬉しそうに話した。

「（そうか、この人たちは現実の世界で死んだことを知っているのか・・・）」  
とザックスは思う。

「なるほど、ところで今、その娘さんは？」  
俺は思わず口が滑ってしまった。もう怪しまれてもいい覚悟をした。

「マリ？マリは今 裏の牧場を手伝っているわ。また今度紹介する

わね。」

とお母さんはいい、家へと戻った。

俺は急いでバイクを牧場へと走らせた。

そして

「ま・・・マリだ・・・ 変わらないマリがいる・・・」  
と俺は覗きながら思った。

本当なら堂々と話したいところだが、今はそういう訳にはいかない。  
一瞬こつちをちらっと見たような気がしたから俺は急いで元の場所  
へと戻った。

どうやら俺は家を持っているらしく、その場所もわかっていて、鍵  
も持っていた。

俺はそこで体を休めた。

・・・

次の日

俺は郵便局へと郵便を取りに行った。マリの家の郵便も含め3通だ  
った。

俺はバイクを飛ばして急いで家へと向かった。

そしてマリの家の前に着き昨日みたいな緊張はなしでチャイムを押  
した。

すると、その日はお母さんではなく、マリが出てきた。

「あ、郵便屋さん？ 今日もありがと〜」  
と言われ俺は驚いた。

「あ、そっか新人さんね。お母さんが昨日話してた。」  
俺は帽子で少し顔を隠しながら郵便を渡した。

「あれ？あなた・・・」  
とマリに言われ俺は正体を本当は言いたかった。

「私の恋人に似ているわ。」  
と言われ少し心が休んだ。

「ほんと、そっくり、あいつ元気にしてるかなあ〜」  
と言われ少し驚いた。

「あ、ごめんね。時間ないんだよね。また、今度来たときあいつ  
のこと教えてあげるよ。じゃあね〜」  
と言われた時、覚えていてくれた事の嬉しさと明日ここへ来ること  
の恐怖が重なり合った。

俺は全ての郵便を配り終え家に帰り一人考えていた。

もちろん正体をばらすのか、このまま隠すのか。

そしてばれたときあいつはどうなるか、驚くか、悲しむか。それと  
も喜ぶか。

と、考えているうちに夜は明けすぐに郵便局へと向かった。

その日は最悪な通達を渡しに行くことを知らずに。

- e n d -



## 最終話（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。

## 最終話

俺はバイクに郵便が詰められているバイクに乗り、手紙を確認していた。もちろん坂見原の手紙があったが、珍しくマリ宛ての手紙だった。しかも黒い封筒。

すると、隣の郵便局のバイクに乗ってる奴から。

「ああそれ、あれだわ、地獄へのパスポートってやつだな・・・俺も今日渡しに行くんだ。

それ、渡しなくても渡さないと今度は俺たちが殺されるらしい。だからちゃんと手渡しするんだぞ。

ていうか、なんでそれが郵便局の仕事なんだよ！ってな」と言われた。

「（地獄へのパスポート？ おい、マリが？なんでだ？）俺は今でもその手紙を破りたかった。でも俺は他のやつらとも帰る約束をしている。

だから・・・

だから・・・

そして、俺は今日もマリの家のチャイムを押す。

ピンポン

「はい、あ、郵便屋さん？ あ、手が離せないから上がってください？」

と言われ、俺は家へ上がってしまった

「あ、2階に上がってもらえる？お茶もっていくから」

と言われ2階へ行った。

「あ、こちらの部屋に入って」  
と階段の下からマリがやってくる。

・・・

「ごめんね、上がりこませて  
とマリは言う。

「あ、こちらこそすみません。」  
と俺は言う

「あ、今日の郵便物は・・・？」  
と聞かれ俺は何も言わずに渡した。

・・・

「そっか・・・まあしょうがないか・・・  
あ、郵便屋さんありがとうね。  
あ、名前はなんていうの？」

俺はザックスと言いつつだっただのを止め

「明人・・・明人です。」

適当に名前を言った

「そうなんだ．．． あ、本当にそっくりだね。 やっぱり。 ザック  
スにそっくり．．．」

と言われ俺はとても緊張していた。

「（なんでばれちゃいけないんだ？ はつきり言えばいいのに．．．  
でも言っではいけないような気がする．．．）」

「あいつね．．． いつも一人で強がって一人で戦いに行って．．．  
私、あいつが撃たれて死にそうなときに助けに行つたのそしたら  
私死んじゃって．．． あいつ、怒ってるかな．．． それとも．．．」

「きっと、その人は．．． 怒ってなんかいませんよ きっと．．．  
」  
となぜか言葉が出てしまった。

「え？ なんで？」  
とマリは聞いてくる。

「え？ その．．． もし僕がその人だったらそうするなーって思っ  
て．．．」  
とどうにかごまかした。

「そっか．．． そうだといいけどね．．．」  
とマリは言っ。

「じゃあ、俺は．．． そろそろ行きます．．．」  
と言った。

「あ、ごめんね引き止めて」

とマリはいい、俺は玄関を出ようとした時だった。

ドアを開けるとスーツ姿の男が2人立っていた。

「坂見原 有理 あなたを最終裁判所へと連行する」  
とスーツ姿の男は銃を向けて言った。

俺は止めることなんてできなかった、だって触れただけで帰れなくなる。

「おい、待てよ！おまえら！」  
と俺は叫んだ。

でも、

「いいのよ、いいんですこれで」  
とマリは言った。

そんな中マリは男に手を引っ張られ車へと乗せられた。

俺は急いでバイクを飛ばし家へと向かった・・・

「（俺には何ができる・・・しかし、触れることは許せない）」

「（もう、俺は何も失いたくない・・・失ってはいけない・・・）」

「（俺ができること・・・そうだ・・・闇術）」

とバイクを走りながら考えていた。

郵便局にて

「おい！お前、今朝黒い封筒の事について話してたよなあ！」  
と俺は朝話した奴に話しかける。

「え？なんだい？突然。黒い封筒？ああ地獄へのパスポートか」

「そつだ！それはどこで執行されるんだあ！？」

・・・

俺は場所を無理やり聞きだし、その場所へと向かった。

「（くそ・・・このバイクじゃ時間がかかる・・・何かいい方法がないか・・・）」

と思った時、目の前にエンジンのかかっている軽トラックがあった

「（とりあえず、乗るぞ）」

と思い、俺は軽トラックを盗み場所へと向かった。

どうやら地獄へのパスポートとは名の通り地獄へと行くことになる。  
地獄へ行くともちろんここへは帰ってこれないし幸せな時間は過ぎ  
せない。

それに、どんな手を使っても親しい人とは会えないらしい。

そんな・・・

そんな不幸な事にはしたくないという気持ちでいっぱいだった。

そういえば俺は闇術を使えるのか？とふと思った。

俺は何となくトラックを降りてダークボールをくりだした。

少し威力は落ちてるが、撃つことはできた。

「（よし、いける）」

と俺は思いトラックへもう一度乗った。

・・・

「ここだ。」

と俺は場所に着きトラックを降りた。

なんとしても助けたいという気持ちでいっぱいだった。

施設の周りには警察がたくさん見張りをしている。

「これじゃあ思っ増分に暴れねえな」

と俺は思った。

「（そうだ、俺は郵便局の制服を着ている。）」

俺は入り口に入った。

「何の用でしょうか？」

と受付に聞かれる。

「いやあく郵便物の配達です。」  
と俺は言う

「でしたら、こちらで受け取ります。」  
と受付係りは言う。

「いやいや、これは本人が受け取らないといけないんですよ。すぐ終わるんで、ね?」  
と俺はねだる。

「わかりました。それなら特別通行証を渡します。」  
と俺は通行証を受け取る。

#### 裁判所内

マリは手錠をはめられイスに座っていた。

「坂見原は現実世界での犯罪の報告を受け取り、この世界でもひそかに反対派へと所属していたことからこの罪を与えらる。」

と裁判長は話す。

マリはずっと黙っていたまんまだった。

俺は急いで裁判所内に入りこっそりと聞いてた。



「（マリが犯罪？何をしたっていつんだ。」  
と俺は思う。

「坂見原、それでいいな。」

「はい。」

とマリは答える。

と、その時アナウンスが聞こえた。

「侵入者発覚侵入者発覚。 裁判所内に緊急警報を報告します。  
警備員・警察は直ちに搜索を」

「（やっべえ俺のことか・・・）」

と俺はひそかに隠れたが。

「いたぞ！あそこだ！！」

と俺は言われ逃げ回る。

「うち、これでもくらえ！！ ダークボール！！」

「うわぁ」

と警備員は倒れる。

しかし、警備員・警察は人数を増やし追いかけてくる。

「くっそーー おい やべえぞこの人数は・・・何もばれない

よな・・・」

「あのお・・・」

と後ろから突然声を掛けられた。

「郵便局の人ですよね？」

それはマリのお母さんだった。

・・・

俺はお母さんだけにすべての事情を話したんだ。

「そうだったの・・・マリのために・・・」

「本当に俺はすまないと思っています。だって、俺があんなに弱くなければマリは・・・」

「そうね・・・最初はあの娘も泣いていたわ。でも次第にあの娘の笑顔を見れるようになって・・・」

「そうだったんですか・・・」

「きつとあの娘がそのことを聞いたら泣いて喜ぶわ！」

「でも、僕の口からきつちりと言いたいです。ですから・・・」

「わかったわ。あなたの口から言うことを楽しみに待っている。」

そして俺は急いで軽トラックに乗りこの場所を後にした。

・  
・  
・  
・  
・

## 仮の家

俺は家に戻り、なんであんな時戻ってしまったんだろうとか今頃マリはどうなってるのかと思っていた。

「（なんていえばいいんだろう。こんな話信じてくれるのか・・・  
マリは俺が来て嬉しいと思うのか？それとも怒るか・・・泣くか・・・でも俺の目的はまだ達成してねえんだ。ここであきらめたらな・・・）」

そして夜が明け俺は仕事へと行く。

多分あるわけないだろうと思われていたが一応郵便物を確認してみた。

すると、坂見原宛に手紙が入っていた。

「まじか・・・」

と俺はバイクに乗り坂見原の家へ向かう。

もう道も迷わなくなった。

坂見原の家に着いた。

いつも通りにチャイムを押す。

ピンポン

いつもは一回押せば必ず一人は出てくるのに、今日はなかなか出てこなかった。

もう一度押そうとした時だった。

後ろから声が聞こえた。

「今日もありがとうね。郵便局のお兄さん。」

と言ったのはマリだった。

余りにも驚きだった。おれはあの後マリは殺されたと思っていた。

「あ、えつと 昨日の手紙を受け取って・・・」

「あああれね、あれは裁判の手紙だったのもうずっとやってるんだけどなかなか結果がつかなくて。それでね昨日やっと結果が出たの無罪って。」

とマリは明るく話す。いつものマリだった。

「そうなんですか。あ、郵便物です。」  
と俺は言う。

「もし、違ったら悪いんだけど・・・あなた本当にザックスっていう人にそっくりなの・・・私を無理やり助けに来たりとかね・・・」

「

とマリは突然言う。

俺は何も答えずになんてですかと聞いた。

「だって・・・昨日裁判所で暴れたのもあなたでしょ？」  
とマリは聞く。

「でもなぜそれがザックスなのですか？」  
と俺はわざと聞く。

「だって・・・私のためにあそこまでしてくれるのはザックスだけだもん！」  
と言われ心に突き刺さる。

「・・・」  
「・・・」

2人は黙り込む。

「ねえ、郵便局のお兄さん。その手紙読んで。」

と言われ俺は封筒を開ける。

俺は1行目を読むだけで涙があふれていた。

『ザックスへ。』

もし、あなたがザックスならこの続きを読んでほしいんだ。

私は、全部知っているの。あなたがどうしてここにいるのかも、どうやってここに来たのかも。

簡単に言うって演技をしていたってことかな。

それはあやまるね。

もうだいぶ前の話になるけど、私は確かにあなたを守って死んだ。もちろんザックスに死んでもらいたくなかったから。

それが一番の理由。

学校の時は闇と光が喧嘩してるとかよく言われてたけどあの時守ってくれた時は本当に嬉しかった。

だから私はあなたを守ろうとしたの。

でも、その事でザックスを苦しめたってことはあなたは私を憎んでいるのかなってずっと思ってた。

だけど、あなたがここに来てくれると聞いたときは、初めて思ったの。

あなたは私を憎んでいないって。

そうだよね？

私に本当のことを教えて』

と書いてあった。

「ああ、そうだ、全くその通り。」

と俺は言った時体が光で消え始めようとしていた。

「ザックス？もしかして？もう・・・」

とマリは言う。

「時間がないみたいだな。俺は全部言うよ。」

俺は・・・”ザックス・アドレス”だ！！。

俺は この時のために全てを懸けてきた！！

俺は・・・お前を憎んでいたりなんてしていないんだ!!

そして・・・俺はお前のことを一生・・・・・・・・・・」

「ねえ ザックス。今私の手を握ればここで一生暮らせるのよ？  
どうする？」

ととても厳しい質問をされた。

残り10秒というところだった。

「悪いが、俺は約束してるんだ、ここには居てはいけなくな。

またこれる日が来たら、一緒に一生・・・・・・・・俺は・・・お前を・  
・・・一生・・・・・・・・」

「ザックスーーーーー!!!!!!!!!!」

・

・

「一生!!!!!!!!!!」

と俺は叫び目が覚めた。

「ザックス!!!」

とテイトとルメリとキリヤとミイナは言う。

「あれ？ここは・・・」

そう、現実の世界へと戻ってこれたようだ。

「わしの力じゃここまでだったようだ・・・ どうだったか？楽しめたか？」

と仙人は言う。

「ああ、十分とな。ありがとよ。」

と俺はいいこの場所を去る・・・

・・・

あいつを亡くした時は特殊能力なんてなんで必要なんだ？とか思ってたが

いまを思うとこの力で助かった人々はどれぐらいいるのかって考えてた。

キリヤやルメリ、テイトもミイナも。そしてマリもだ。

俺は俺なりの生き方があるんだ。

それを大事にして生きて行こうと決心した。

マリのためにも、俺たち英国系日本人のためにも、そして世界のためにも・・・



・ T H E   E N D   ・

あとがき

今回、全話見て頂いた方も途中から見て頂いた方も本当にありがとうございました。

こんなくだらない小説で。

自分でも途中から意味が分からなくなり多少話が繋がっていないところもありますが。そこらへんを反省しつつ次に書いていきたいと思えます。

第2期は小説を作り直して書くつもりです。

またこの小説はしばらくの間残しておくつもりです。

またの応援を宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8344w/>

---

ダーク・マジシャン

2011年10月19日02時00分発行